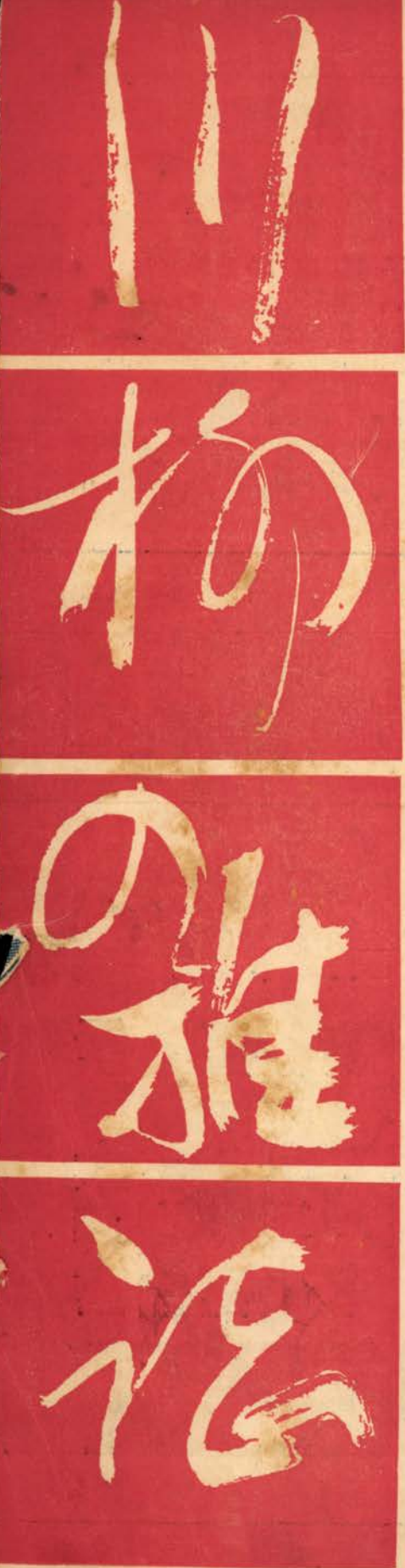
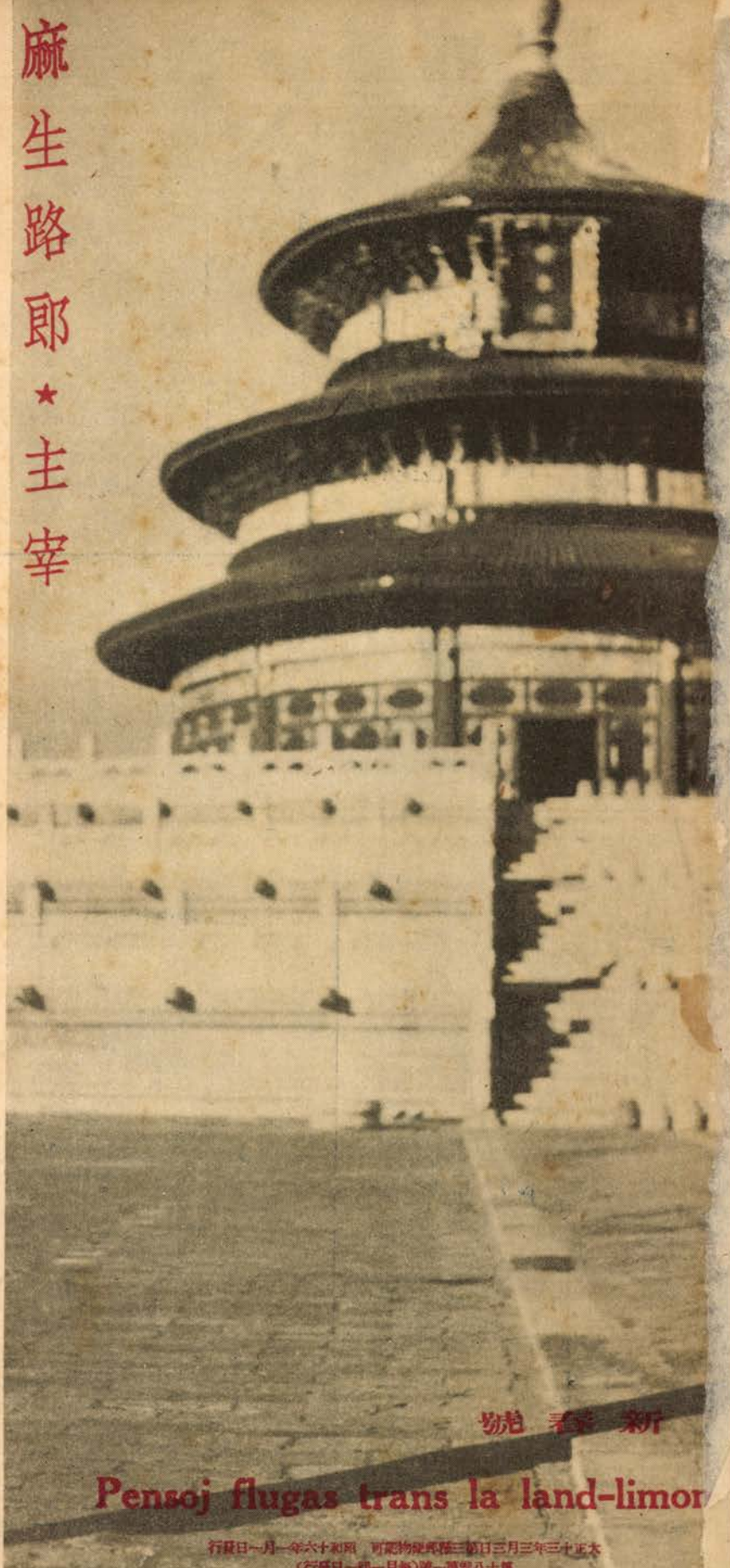




麻生路郎★主宰



新巻 物

Pensoj flugas trans la land-limoro

行發日一月一年六十和照 可記物便典三第日三月三年三十正太
(行發日一初一月每)第一第卷八十第

81

浪花節

梅原秀夫演

中田比良夫作

野口英世

苦難の少年時代

日本が生んだ人類の恩人野口英世の少年時代を、人気作曲家梅原師が熱演した傑作盤、之こそ熱涙進るファン待望の名盤です

ドーコレクションキ

〇二・六 入一ダルホ麗美

開花嫁の歌

松島詩子 唄

シンガポール

松島詩子 唄

大陸の歌

林伊佐緒 近衛八郎 井口小夜子 横山郁子

我華の生命線大陸に連なる日本女性の雄々しさを唄った松島詩子最新傑作歌謡曲！

ドーコレクションキ

(五ハ一 救一)

銭六 (料違) 銭十八價定★

ふ乞を算加費資料違は文註外注★

著郎路生麻

に問慰の線戦★

に物讀の春新★

地番二八一丁二通岸海島出市堺
洞 朽 不 所行設
 番二九三〇三版大替換

新川柳評釋

一強勉生人て笑哄と苦笑一

ムツニペン

書きよい
 錆びにくい
 強い
 廉便い

新装パンフレット
 内中越次第進呈

店商井澤 式機販大

敬神崇祖

伊勢大神宮

檀原神宮

熱田神宮

参拜

大坂より 急行二時間
 名古屋より 急行二時間
 京都より 急行二時間
 大坂より 急行四十時間
 名古屋より 急行四十時間
 京都より 急行四十時間

大軌参急電鐵

に後銃は等我



私は近眼で兵隊にはなれなかつた一人である。兵隊の話が出ると、君なんか、戦地へ行つたら、差し詰め墓標書きだなアと云はれるが、私は墓標書きでもいゝ征けたらと心ひそかに思つてゐるのである。

長男が生きてゐたら、たしかに、

麻生路郎

勅題

漁村曙ひこりひこりに海の幸

魚の世界では海の蒼さを信じてゐない

スキーが床に飾つてあるひごり者

青疊首吊つた歴史忘れて

案もなくバトンを渡し給ふなよ

酒
(三句)

一本と云へば一舛だつた過去

一本位要らぬ云はぬのがをかし

馘になつた人の名刺かメモにされ

丹路居

新築へもうスリツパは春の音

雪原・南風兩君入營

日本の男になつた舉手の禮

表紙……(北京・天壇)……岩崎柳路
川柳寫眞……八步・哲

ただ一路(維成)……………麻生路郎(二)
隨想三會と四M其他……………小山文三(三)

迷信と川柳座談會……澤田四郎・石井白面人・戸田孤蓬・高鷺亞鈍・麻生路郎……（二四）

漢字の異國地名……………古川風竹(三)

武玉川四篇研究(二四)

隣組

(其の二) 曉問・鮎美……………(九)
(其の三) 山雨樓・文庫……………(三)

ユーモアを探る

狸……(續)……前田五健……(二六)

世界史記……萍花生……(五)

貝
新居を築く
鉤
岡田某人
鈍
記

川柳 隣は新婚……小畑自由朗……(九)

田舎に住めば……姫田夕鐘……(三四)

蛇隨筆
(其の一) 生々庵・波夢造・不水・紫香… (三)

仙太郎・かほる・九坂・某人……(二二)

近作柳櫺……麻生路郎選（三）

同舟近詠	諸	家	三
巧同句少	路	郎	一
不			

葛根廟にて(句)……………靜觀堂…(三)
一名刺……………西田艸樂選

奥村丹路選

各地柳壇……(三四)……川柳書架……(二七)

後) 記……(三元)……社關係の人々……(四)



た 一 路

麻 生 路 郎

近ごろ一人一役といふ言葉が芽を出して来たが、一體芽の出し方が遅い位のものだ。

★ 幾ら一人一役と云つても、口が喋べることに食事することゝの二タ役をしてゐるやうに、實際は二タ役も三役もしてゐるのであるが、それになるべく統制して、シンブルにすることだ。

★ 一見難しい仕事でも、ほゞしてシンブルにすれば誰にでも出来る。それを世間では何事でも、すべて難しく考へ、複雑にすることばかりに骨を折つてゐる。寄つてたかつて船を山へ押し上げて見たところで、それが何になるものでもない。

★

役員を振りあてゝも、一向出て来ないので、サツパリわややと、ぼやいてる町會の役員さんがゐたが、それはどこかに無理があることを考へないからだ。役員としての責任を果たしたくても環境がどうしてもゆるしくてくれない場合もあらうし、性格的に全然不適任である場合もあらう。それから先づ解決してかゝらねばいくらぼやいて見てもはじまらない話だ。

★

友人の畫家が隣組の組長さんになつた—イヤなつたんぢやない、それだのさうだ。それを無口の愚妻が、驚いて私に報告した位だから、私も驚いたが、ホントに驚いたのは

愚妻よりも私よりも本人だつたに違ひない。固辭したそうだが、幾ら固辭しても新體制だといふので固辭することをゆるされなかつたとか。友人は決して無能ではないが、隣組の組長さんとしてはお世辭にも「適材です、おやりなさい」とは云へない性格の持主である。

★

この友人に、畫による職域奉公をさせたら、徹夜位はしてくれるだらう。

何事もこゝから發足すれば、無理がなくて、萬事スムーズに運ばれて行くだらう。あゝでもない、斯うでもないと考へぬいて、適材でもない人を引張り出して、やつぱりこれではいけないといふのでは所謂下司の知恵である。

★

火事は消防にまかしておけばいい。

★

私の職域奉公は川柳に據る新日本文化の昂揚にある。 — 一月一日 —



隣組

(其の一)

隣組に關しての感想並びに美談、逸話、奇談等に就て執筆していただきました。願不同 (編輯局)

北京 森 東 魚

或工場で左官が切にする日本紙をひと山持ち込んだ中から私は云はば現在の隣組の回覽板と云つてよい持廻りの達し書きを二三拾ひ出して置いた。其の新年に關したものを左に披露する。

『府下從來元日に表口を掩鎖しひつそり憂眠するの風習に候處廉有祝日にかゝる陰鬱の形容は甚以不都合之事に付來ル第一一日より舊習相改相應の儀式を装ひ新年を祝し和樂相賑ひ可申事』

右之趣管内無洩相達るもの也

壬申十一月

大阪府權知事 渡邊 昇

右之通過日御達に付而は當年内より門松注連飾り等致し一月一日は從來之元日に付右設け可有之就而は御布令面之通三ヶ日は表口戸さし不致舊習相改新年を祝し隨分相賑ひ和樂致候様町々にて伍長に申聞夫々組内に懇に同人より相諭候様可被取計候事

申十一月廿七日 區長

右之通御達に付此段承知可有之候 戶長

右之通奉承知候爲其即印形如件』

とあつて隣組連中が捺印してある。因に壬申は明治五年である

顯知出 小畑自由朗

此の町内だけが、未だに新體制へのお隣組が出来上らない。

業を煮やした若い連中が、其の組織草案を作つて、年寄達の又しても相談會目がけて持ち込んだ。と、わし等に何んの相談もせんと、と、年寄連がムキに成つた。そんならあんたはん等の、と、若い連中がへり下つたと、ちよつと待ち、と、年寄連は別室に退いて、暫し、やがて代表さんが現れて、しやあないこのさいや、萬事、君方にまかしたげるさかいに、他の町内に笑はれん様にやつて見なはれ、と、苦り切つて云つた。

大阪 後藤 青兒

初めて御目にかゝりますと向ひの御主人から挨拶を受けて新體制の必要をはつきり知つた。

然しこれは男の方の事で、女は中々さうではない隣組はおろか町内夫婦の組合せまで知つて居るから頭がよい。隣組今後の大行進には女の旗持を先頭に立てなければ駄目だなと感じた。

島根縣 尼 綠之助

隣組の中にも政治が必要である。川柳もあれば論語もある。

華々しく報導されてはゐるいが各々相當な活躍をしてゐる、腹の立つ事もあるが大きく呼吸をして考へればをかしも雄々しい。

大いなる流れ動くも動かずも

大阪 田中風葉

トンカラリの歌に依つて一層隣組の機能を近所でも認識されて來た。嬉ばしい事だが作句の時間をとられるので弱つてしまふ。官廳各方面への連絡から町會本部の企畫記録購買票の整理配布、會長の相談相手から聞き役なだめ役迄やらされてふらふらになつて居るのにトンカラリと隣組の問題迄持込んで來る。

そして未だ暇をやらぬと云ふ様に青年團の教養部長と言ふからおよそ毎日毎日何が本職やら分らぬ有様、本當に我ながら微苦笑ものである。平素の御疏遠をお詫びして、何卒本年も相變らぬ御指導をお願い申上げる次第です。

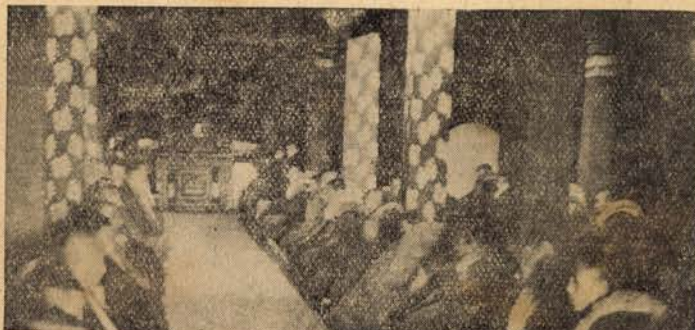
尼崎 酒井斗風

この間の、防空演習に、隣組の婦人部隊長になつて初陣をしました。

なんだか勝手が違ふので、心臓の強い僕も參つてしまひ、後で鮎美さんに冷やかされましたもう一つ隣組で買つた報國債券を夢に見てゐます。

大阪 高橋かほる

内の町内はまだ隣組は有ませんが、お隣さんの前裁の紅い山茶花が毎年冬には塀越に咲いてるのを朝起きてちようず使うて神さん拜んで見るとややこしい戦國代のともすれば忘れられさうな美しさを保つてゐて呉れさうで誠に尊く思ひます。



内蒙名利葛根廟にて

小川靜觀堂

日當りの土堀を背なに喇摩と豚門外不出の御二經とかや埃たたく



★左圖は興安南省王爺廟にある名利王爺廟で西遊經策の典型的なもの、點出人物は小川靜觀堂氏。右圖は興安南省の名利葛根廟、これも四遊經策で、數十人のラマが修業中である

川柳塔



一路郎選

兵庫縣 奥村丹路

妻とふたり月日の経つを數へてゐ
満員に慣れてボタンが一つとれ
臆病な鶏とやうやく住みなれし
朝ひらくたのしさを知り初めしかな
ニツと笑つて夫人と夫人窓と窓

聖家口 岩崎柳路

盃をうけた眞似して下戸の眉
軍需景氣か虎造節の二階から
國境で顔を見られたマスクの妓
仕舞風呂少しぬるいと云ふ欠伸
赤い柿故郷を偲ぶ色であり
十二月ベツタラ漬へ北の風

再び民國議員に當選

當選の歡喜見事な鯛の艶
落選を慰ぐさめてやる暇もなし

兵庫縣 寺井銳々

金賣るに隠居自ら出掛けたり
師走とは思へぬ僧と話すこと
物思ひあればか歩行デグザッグ
銀行の守衛借金とは知らず

盛裝の肩へも街路樹葉を落し

布哇 高澤一、浪

好男子物の美事にのりおくれ
恐れ入るばかりくの新入社
意味深な一言AもBもCも

二時三時男の沽券何處にある
召され征く今日から罪の子にあらず

古川風竹氏銀婚式を祝して

新婚のまんま二十と有五年
日本に獨立祭のない誇

大阪 戸田孤篷

新居への道逆光線の薄など
披露宴でござりますると花をもち
藝術と云ふ生きを途まだあるぞ
唇へ唇を描く女なり

伯父の死(二句)

遠路御苦勞様代もふくめる葬式屋
御會葬とぎれかりがね見上げたり

大阪 中島生々庵

寢台を課長にゆづり立つてゆれ

川柳二千六百年史を祝ひて

喜びがせつない胸をかけめぐり

義兄の胃潰瘍手術(二句)

身體髪膚まあ胃袋を切りとるの
胃袋は半分棄ててまだ飲む氣

兵庫縣川西町 戸倉普天

贅澤な普請をしはせとは言はず

御土産は重いと米を田舎から

支店長が國民服で皆倣ひ

發車ベル遺骨を抱いて聲もなし

福知山 小知自由朗

旦那來ん二號を隣保持てあまし

これ見よとばかりに街を肥車
アドバルンあれで使命を持つてゐる

某人氏來訪

珍客へ鯛の煙り持てあまし

ホノルル 古川 風竹

体制は教育勅語それでよい

奢侈品輸出奨励

金銀糸弗へ賣られる本望さ

ハワイの米化新体制

日本語の幅狭くさす米化論

ホノルル 前山 北海

落選を聞くほろ苦きビアの味

禁令の祖國に學ぶ無駄の數

親日が排日にする單純さ

米國選拔徴兵

徴兵に取殘された四十過ぎ

日本語の命名だけは父が付け

裏なりと呼ばれて男のせせこまし

ホノルル 藤井 友郎

女房の信じ切つてゐるうつくしさ

信仰に生きぬいて來た未亡人

金持つてゐるから怖い世間なり

借りられた方が段々弱くなり

一日の勤め終つて來た裸

大阪府高石町 米本 貴志子

母さんは明治の歌を口誦み

橋釣りを追うに巡査の草臥びれる

大河のよさ灯が寫り霧に酔ひ

鐵瓶のたぎる我家へ退院す

退院へ婢心の花を挿し

佛像の前に凡百影を消し

病んでから線の太さをうたがはれ

大阪 橋本 綠雨
隣組みんな揃うてる休閑地

一升の米を借りたり貸したりし
大根のトラックが續く十二月

大阪 高橋 かほる

どや／＼と樞原神宮の歸りなり

飛びそうな姿オーバーに手を通し

洗濯屋廻覽板をことづかり

一列は他人ばかりで面白し 横濱 福田 山雨樓

このごろの多忙銅像わきを過ぎ

登校の子に佛心のあるあはれ

已歳に寄す

已歳とは女の歳か劫火燃ゆ

西園寺老公薨去(二句)

新体制の眞つ只中へ巨星落つ

觀音のかんばせに似たうつせみよ

大阪 麻生 葭乃

初日キラ／＼網は殺生忘れてる

うたた寝となる御佛の眼の長さ

いけすかない仲居も生きる姿にて

皿舐る氣か海底の金さぐり

お達者なことよ蘇鐵がよみがへり

★

大阪 中内 翠芳

街頭に作れ贅澤診断書

ヨチ／＼と子供電車を停めて居る

下關 多田 市多樓

新体制妻の仕草も自肅めき

新体制吾れ澎湃の一人にて

吾れもゐる昭和維新の一頁

隣組別莊一軒だけ省き
つぎはぎの足袋見せあうて婦人團

靴が鳴る今朝の元氣も征く日なり

十二月九日今治の文庫氏を訪ふ

伊豫は良し流に月がのぼりたる
初對面座敷に菊の香が満る

下關 濱田賢次

國策にそはず刑事の目を感じ
化學とて神祕に勝てるものでなし

雪よ降れく元旦の朝にせよ

惚れられるほどの男に意見する
春も來るだらうと我慢して務め

廣島 大森風來子

菊畑からもう灯が點いた汽車を見る

眞下麥作氏へ贈る

新婚へ師走の風が軽くそれ
だまされてもよいとはよつほどほれてゐる

成金を夢見る友よまあ坐れ
賣りません差上げますと怪氣焔

岡山 鈴木九坡

廢物利用結局不器用さに呆れ
デパートの模様替へする日が續き

身の上相談無闇に諦めさせるなり
コツくと時計に似たる暮らしする

窓口で威張る仕事もありはあり
女連れしきりに煙草吸ひつける

父を亡ひて

白雲悠々地上の悲劇へちと遠し

兵庫縣 水谷鮎美

勅題

漁村曙出征勇士送られる

モンペイと國民服と初日の出

父も子も國民服のお元日

そろばんの要る正月も頼もしい

師走八日 京の顔見世觀劇

鶴退治

武勇今女心をとりこにす
かすみの城

平家女護島

偽らぬころ陽も夜も波に聞く
御存知幡隨院長兵衛

焚火して待つとは知らず飛脚くる

徳島縣大吹町

姫田夕鐘

秋の壁思案に寄れば亡るなり
秋の田で牛のスローが目立つなり

急テンボ丸腰となつて渡満する

橋の長さ傷病兵一時雨れて來
こんな白かつたかなあと米の飯

榮養を攝つて入營待ちあぐみ

大阪府柏原町

宮岡白峯

米國の旗へ夕陽は迫りたり
佛樣賞與一晩だけ貰ひ

軍服で伊勢奈良京都樞原へ
年賀狀子供も二三枚は要り

大阪 須崎豆秋

三角な顔してゐたり十二月
泡をとばして獨逸ではく

休閑地利用

ちりめんの裾をよごして蒔いてはる

大阪 市場沒食子

近頃は氣も折れお寺にも詣り
慰問品も不要と無事な便りが來

交際費酒が不自由でつかさみ
轉業に迫られつゝも十二月

新町會誕生

暇の無いのを承知で役をあてがわれ

大阪 中西おさむ

漁村曙

鉢巻をはづし初日へ向く漁師

啄木は笑ふ(四句)

赤ん坊のうごくをぢつと見てゐたり我になければ

妻のきたなく見ゆる日赤ん坊の欲しく

古きトランプバラバラとくりて見ぬあの頃の

一行の字句にこだわり本を閉ぢたり

待たされた擧句廊下の長いこと

大阪 正本水客

感情の露骨な夫婦仲がよし

總ガラス工場の休み温かし

新体制メートル法が忘れられ

冬の土くろく自動車練習所

半白のひげ軍装のたくましき

名和長年(歌舞伎座)

主上在ます小舟へ波のゆれやます

豊中 黒川紫香

遠慮なく大根洗ふ向ふ岸

番小屋へ素うどん熱うして届け

久し振りに逢うて商賣から問はれ

商談のコーヒは冷へてからのまれ

何事も笑へばいと知りつゝも

大阪 丸尾潮花

ニュース館肩のあひから見て戻り

言ひにくひ事を代書は二度尋ね

出征旗妻の覺悟がたのもし

公休日貯金の列にゐる女給

神戸 岡田某人

こわがりな犬こわがりな人に會ひ

そう云へば月の色さへ十二月

極月の窓竹竿の影一つ

驛前の風急用の身に痛し

皆他人だなあと思つて箸を割る

往復はがきがボケツで折れてゐる師走

尼崎 酒井斗風

子のひとみ夫婦あらそふ瞳をそらし

季節風遠い過去まで想ひ出し

俵給の袋よ今日も木葉散る

出鱈目の夫婦へこども生れたり

ゆきつまる生活におもふ雲の色

大阪 北川春巢

富士山の見える景色で子が遊び

凡人も新体制へ何か云ひ

慰問文の借りが男を寝つかせず

白足袋をはくと役者に間違はれ

藝道を論じ半身不随なり

賽銭は投げずおみくじにはたより

大阪府 小林橙舎

節米の折柄セバードやると云ふ

隣組など薬價の値切られる

隣組仲よくサンマ焼く臭ひ

閑地利用下肥と聞き逃げ給ひ

腕を云はず薬不足を語る醫者

二年生理想を問へば自爆なり

大阪 尾崎方正

合併三十年博文寺に異状なし

見舞の方がやつれてゐます痛々し

大阪 佐竹香附子

偉がりの癖に末座に坐つて見

一部屋を別に欲しがらる頃となり

釣姿よくくみれば博士なり

大阪府 西尾葉

蠅叩き一匹叩いて返事する

下関 櫻川 不水

釣れない日こよみの所爲にして終ひ

盆栽の様にいちけて小役人

泣く子にも馴れてミシンのよく運び

ありつたけ費つて月に嘯けり

一、二圓なまじ残してさびしがり

金のない時は財布の色が褪せ

大阪 田中 風葉

フエルトと靴と竝んだ寫真室

突込めば新体制と逃げを打ち

組長へ委すに荷物ちと重し

號令で動くと決めた天下り

有名無名洋服脱いで竝ばされ

廣島 濱田 久米雄

小役人氣質おでん屋だけの金

子と歌を歌つてゐます朝寝なり

寄附をする話小さく揉めてゐる

小役人今日はお芋の値が下り

大阪 菊澤 小松園

我が業も要救済の中にあり

すき焼の湯氣のぐるりの子の笑顔

寫眞撮る丈けにモンペを借りに来る

切符制又現金が一つ増え

掌を見詰め啄木にもなれず

言ふことはしつかりして居る

大阪 魚住 満潮

年玉を呉れる叔父さん幕に逝き

大番頭小番頭幕をぬけ遊び

辯護士に食はれましたと暮の辻

猫いらす吞んでお轉婆派手に死に

借してやる方も泣いてる五圓札

プロレタリアと言ふ言葉なぞもう忘れ

隣組家主が來たで座が白らけ

中學へ行く兒行かぬ兒辻で會ひ

借金をして借金を返しとき

おなご共騒ぐな炭の無い位ひ

岡山 逸見 灯竿

人絹でくるんで青春燃えてゐる

臣道實踐赤貧の身にかはりなく

伸びすぎた背がはづかしい男にて

大阪 西川 青美

樞軸は南米までも串刺しだ

堺 麻生 アート

靴々靴が最大の要素だつた

オーパー脱ぐ心こそよき十二月

思ひ出した嬉しさ茜の陽を浴びる

限りあるいのち人間のいぢらしく

大阪 大坂 形水

ジュウジュウの國へ遠吠えするばかり

書きものと首つ引きして商ひす

奉天 吉田 水車

迷彩に似たり朝鮮冬の山

急行といへど漫々的で着き

大阪 大西 八歩

女色をば好む血筋も繼ぎ給ひ

薄倅の長きを思ふ指サツク

今日よりは佛間へ知らすばかりなり

松風が耳につくとはもたいたなし



(歩 八) リゝすを茶たれなはを然に風松

哲 井 福 ラメカ

川 柳

隣は新婚

小畑 自由朗

「奥さん」と、トン／＼と
お隣さんから壁が叩かれた。
「へい」と彼女は綴つて居た
シャツの手を止めた。
「お遊びにゐらつしやらない」
「おゝけに」と彼女はベコンと
頭を下げて、「行かしてもらひ
まつさ」と、いそ／＼とした様
に立上つて、「あんだ」と、
約三時間前から、朝刊と夕刊を
膝の上へ乗せ代えながら無然と
して居る夫へ、
「わたしちよつと、お隣へ行つ
て来まつさかいに、子供達にオ
シツコやつといっておくんはれ
と、土間へ下りて行つた。
「行くねやつたらお前やつとい
て行けよ」と夫は物食けに、そ

れでも、布園から喰み出して居
る三人の子供へ「風を引くがな」
とあわてゝ立上つた。
「たまにそれ位しておくんは
つたつて、罰は當らしまへん」
と、彼女はあわてゝ隣へかけ込
んで行つた。
「しやあない奴つちや」夫は其
の後姿へ舌打ちをして、三人の
子供の寝顔を、今更の様につく
／＼と打眺めて、「早よう大きゆ
う成つてのう」と祈る様につぶ
やいた。
お隣は、彼女の夫と同じ會社
へ務めて居るとは云ひながら、
不景氣な倉庫番の彼女の夫と違
つて、近頃羽振りのきく、機械の
方の熟練工様だつた。さうして

而も、女學校出の奥さんを迎へ
た新婚のはや／＼だ。其のはや
／＼に時折徹夜の夜業番が廻つ
て来ると、彼女ヘト／＼と
と壁が叩かれるのであつた。
「やつと、結婚式の寫眞が出来
て来ましたの」と、奥さんは嬉
しさに其れを取り出した。
「まあ！」彼女は手にして居た
コーヒをあわてゝぐつと呑み干
して、寫眞を取り上げて「まあ
！」と再び感激の聲を上げた。
立派なモーニングや紋付を着た
人々の打ち並んだ式場の全景や
上原謙と桑野道子の様な二人の
寫眞に「結構だすな」と思はず
溜息をついた。それにしても、
此の倅な結婚式に引更へて「わ
たえの」と、拾何年前の吾身の
其時の有様に、ひよいと熱いも
のが込み上げて来るのをおぼえ
た。
其頃、
彼女は「めし屋」に奉公をして
居た。其頃、彼は毎日めしを喰
ひに来る客の一人だつた。世話
好きなめし屋のお女將さんが彼
女の耳へ囁いた。「彼の人、こゝ
十年間程うちへ御飯たべに来や
はるけど、まだ一つべんも待つ
てくれと云はつたことのない
はんまに感心な人や、あんな手
堅い人を亭主に持つたら、女も
一生倅や、せやさかいにあんだ」
と進められるまゝに、お女將さ
んに風呂敷を持つてもらつて、
駄菓子屋の二階を借りて居た彼

の元へ、「今晩は」と、隣入りを
して行つたのであつた。
「ねえ奥さん」
と、隣の奥さんは彼女に甘える
様に云うのだつた。
「あなたの記念寫眞も是非拜見
させて頂戴な」
「えゝッ！」
「お願ひ」
「あほらしい」
「だつて」
「何をうだ／＼云うておくんは
はる」
「ひどいわ」
「いゝえ、わたえ等の様な者ン
にあんだ、記念のなんので」
「其んなことおつしやらないで
よ」
「もういぢめんとおいておくん
なはれと云うたら」と彼女は、
横を向いて「御免やつしや」と、
頻りに鼻をかんだ。

隣組 (其の二)

愛媛縣 米澤曉明

笑ふに笑へない嘘のやうな話
回覧板を讀んだ某が役所へやつ
て来て不平面で口を切つた。
「西園寺で國葬があるとの事、
一體西園寺といふやうな寺は
どこにあるのか。此の町には
ない筈何かの間違ひではない
か」と。
隣組にもこんな人があるかと思
ふと心細い限り。

兵庫縣 水谷鮎美

こころのとなりぐみは永遠の
者です。一心一向に川柳報國の
できるのはこの上もない紀元二
千六百一年の喜びです。水車・
夕鐘・ト居・斗風とは柳心合掌
に温きびたこらすの原理のと
なりぐみです。

名物とんち



北電 六五 六九 七四 五八 番

武玉川四編研究 (十四)

梅 本 塵 山
森 東 魚
蛭 子 省 二

(331) 旅衣うまく寝る夜はなかりけり

東魚「この「うまく」は、樂にといふ以外に、多少ほのかな情味といふ心持ちに、ふれてゐると思ふ。情緒纏綿といふ程ではなく共。」

塵山「所謂旅愁であらう。」

省二「旅馴れた人でも、自家と違ひ、寝心地がビツタリとせぬ。」

(332) むつと氣に千兩箱の運か盡
省二「續にさはつて、むつとした時、遂にヤケ氣味となり、千兩箱も蕩盡。」

東魚「上五が變な氣がされる。」

塵山「むつと氣に」は少し判らぬが、手に入るべき千兩箱を、自己の短氣に由つて、運悪く取りそこねたのではないか。

省二「むつと顔は續にさはつて、ふくれ顔と説いてゐる。むつと氣はそれに當る。運は千兩箱の運命と解したのであつた。」

(333) 酒屋の敷を呑んだ順禮

東魚「順禮が報謝をうける柄杓、それで報謝をうけた數ほど酒を酌んだら、數軒の酒屋の酒を酌み干すほどにもならうと、寄拔な觀察をしたのであらう。」

塵山「酒屋の敷が不明である。」

省二「酒好の順禮。各地へ巡つて泊つた都度、一本きこしめすのであらう。それを酒屋の敷をのむと、面白くいつたものと思ふ。數人引卒した尼さん遍路が、遍路宿につくと、一合つゝ呑むのを知つて居るが、これなども、各所の酒屋の敷を呑むわけである。」

塵山「酒屋を見る毎に飲んだならば、其の酒錢は多額にのぼり、順禮の身に堪へられまい。」

(334) 抱付て翌恥かしき後影
省二「抱付いた昨日を思へば、後影をみてさへ恥しい。」

東魚「ものゝはづみで、抱きついた昨日を思へば、其人の正面を見かねて、其後影をひそかに見やつて、今更恥しく思ふと云ふのではないか。」

塵山「翌恥かしきこと、未來のことを想像するのは可笑しいと思ふ。」

(335) 欠して居る癩病の供

東魚「癩病やみが、ちび／＼と時間かゝつて、用を達してゐるので、供の者が欠する許りと、大業に云つたのであらう。」

塵山「事實に有りさうに思はれる。」

省二「日本に癩患者が多い。(だから癩病と瘡氣の無いものはない、との諺ありと「諺語辭典」にある)。供に欠びさせる丈けではすまぬのである。『淋しいといふ文字は癩病』(武17。)

(336) 三ヶ日顔を見ぬ物唐からし
省二「新年の御馳走には、七色はいらぬ。」

東魚「唐からしのやうな、異國のものは、用ひぬといふのであらうか。」

塵山「昔は新年に、五辛(蕪類)五辛(蕃椒類)を、忌み憚つて食はなかつたのである。」

(337) 寝て年を聞ぬ程にそ成に覺

東魚「相手の年を聞いたり、生れを聞いたりするのは、初心のうちだと云ふのであらうか。」

塵山「相手の年を聞くのは、初會の顧客の常式である。」

省二「程にぞ」が思はせぶりの作。

(338) めれた屋をつかむ靈棚
省二「靈棚の供物へ鼠が出てくる。手向水もある。『靈棚や鼠もつかず哀なり』(爾選。)

東魚「靈棚に露けきものの數々が、供へられてゐる心持がみえる。」

塵山「賛成。」

(339) 合鏡に三ツある顔

東魚「鏡にうつた顔が、更に他の鏡へ寫りうつて、結局三つになるといふのであらう。」

塵山「一向にたわいの無い句である。省二全くだ。三ツうつた處が、みつつけ處。」

(340) よい中見れくは死ぬ人か損
省二「後妻との良い仲をみれば、死んだ先妻は損んな人となる。」

東魚「賛。死ぬ者貧乏と云ふ言葉もある。」

塵山「死靈は成佛し難からん。」

(341) 浪人に成て目のつく青によりり

東魚「これも分らぬ。」

塵山「青によりりは、俗に云ふ青瓢箪の類か。」

省二「浪人だから青には密接な關係はあらう。『青によりり』は關東で青桐の事をいふとか。句意は判り兼ねる。」

(342) ふる雪を口へ入れんと反り返り
省二「柳多留」では、「禿そり」とある人物が判つた方がよい。

東魚「前句關係で人物を、わざと言外に想像させたのであらう。」

塵山「禿反り」と人物を、表はした方がよい。

(343) いき／＼とした後家ハ憎れ
東魚「しほれて居てこそ、後家は同情がある。」

塵山「嫌になつて、世間の批評が喧しい。」

省二「確に目につく。だから、いき／＼とし、白粉を塗りたてるとは、憎まれる。」

(344) 根を聞は獨ころひの墨衣

省二「根」はよくわけを聞けばの

意か。「獨ころび」は獨りてたはれ、ころぶ事であらう。

東魚「獨ころび」は、自失脚を招くやうな事になったとの意であらうか。單に旅の獨寝といふ意ではなさうに思ふ。

聖山「耶蘇教徒が他の宗旨に變ずるをころび(轉)と云ふ故、自己一人が改宗して、法衣を纏ふといふの賦と思ふ。「根」は理由の意である。

(345) 舟から譽る 晉女の傘

東魚「これも難解である。花時の俄雨に、用意賢しくも、晉女が傘をさしてゐるのを、どうにも防ぎ様のない船から譽めるとも云ふのか。(或は單に、舟からひやかす場合を、ほめると曲つて云つたのか。)

聖山「前説の如く、その用意を譽るのである。

省二「晉女相手だから、譽めるにしても、からかふ意は含むであらう。

(346) 押詰るほと妻の名言

省二「女房の云た師走に成りにけり」(武6)、「其言や宜なりと押詰つてしまつた。

東魚「それ御覧なさいと云はれるやうな年末の苦境に立到つた。

聖山「昔から同想の句が少く無い。

(347) 君か姿の掛物に 互り

東魚「君といふのは、君傾城の意であらうか。遊女の反り身の姿が、描かれてゐるのであらうか。或はその掛け物を見る人が、反りかへつて見上げるのであらうか。

ら。

聖山「花魁の道中する時は、反身になつて歩く故、それを聯想したのである。

省二「反るのは、鑑賞の態度を示す。

(348) 寒壁にふるひか来れハ鷗か鳴

省二「寒壁障子に、シンから寒むくなつて、ふるへて来る時分は、鷗がなき段々夜が明けかける。

前説通り。

聖山「雞は眞夜中より鳴くもの故、鷗鳴くで有りたと思ふ。

省二「いかにも一番雞は午前二時頃鳴くと云はれる。丸棉をとると一番鷗がなき。然し二番鷗三番鷗もある。鷗鳴を催す。鷗鳴枕といふものもある。勿論「鷗鳴く」でも結構。

(349) 玉川の一ツは悪く言はれたり

東魚「高野の玉川は、毒水と悪く言はれるとだけであらう。

聖山「平凡。

省二「呑で廻れば五ツ玉川(武4)。「わるく呑では毒な玉川」(武12)。「玉川にさへ毒のある人心」(武5)。そこで利用した句「北に當つて毒な玉川」(武17)。

(350) 夕藥師傘も 八本賣日也

省二「藥師の縁日は八日と十二日。茅場所の瑞光藥師には人出多く、傘を名物とした。八本は八日に掛けたもの「八日までこらへるとさす破傘。」

東魚「賛成。

聖山「無理に八の字を詠み入れたもので決して佳句とは云へぬ。

(351) 大盗人を七まとひまく

東魚「したゝか者故、縛り纏も七重に巻くと云ふので、幾まきも嚴重にいましめた趣を、かく云つたものと思ふ。

聖山「謠曲道成寺」の、龍頭をくはへ七纏ひまどひ、の文句取であらう。

省二「文句取であつて、「大盗人」といふ言葉が確にいきる。七纏ひ、七巻き、七曲りなど語音もよい。

(352) 持佛てためす後の女房

東魚「安心して寝られぬ、物と思ひ煩ふ心持ちであらう。公事に出る夜はうつふしに寝る」と云ふのが、「武玉川」にある筈。

聖山「賛成。

省二「公事」の類詠を拜見し納得す。「旅の留守」を詠むだ古川柳は、兎角女房に別儀あるものが多いので、其方へ關聯させてみたのであつた。寝苦しい折りなどにも、うつふけになり勝ちである。

(354) 羽折着て請狀に行御垣守

省二「御垣守だから、特に羽折着てと云つた迄。

東魚「御垣守が人の請人に立つ場合か常の姿と違ふ普通の人のやうな羽織姿で出掛けるのを興じたのであらうか。

聖山「御垣守は平素白張を着てゐる故請狀に行く時は羽織を着るのである。

(355) 筆に成ても鹿のいたつら

省二「奈良名物の鹿巻筆は、無心丈なと書く遊女が用ひたもの、「視引きよせ墨をすり、鹿の巻筆妻戀鹿。」鹿の毫を穂とし、軸には色糸紙などを巻く。

東魚「武左衛門の落語も聯想される。聖山「鹿巻筆でなくとも、普通の筆に鹿の毛が使用される。

(356) 牡丹を見てもやりて暑かる

省二「この遣手は肥満して居る。性質もせか／＼して居る。牡丹は「春十日夏十日の花壇なり」であるから、その色の赤さからも亦暑かる。

東魚「肥満してゐる暑がり屋なのに違ひない。牡丹をみて、あゝもう閉口する夏になるわいと、暑がり出す奴。牡丹と遣手との對照奇抜な處がヤマである。

聖山「深紅の燃ゆるが如き花を見ては、只暑さを感じるのである。

武玉川四編研究正誤表二〇三號

(真)(段)(行)(誤)(正)
九 一 二九 得て得る 居る



ユウモアを探る

⑦

或一つのこ

沖野岩三郎

十年も以前のことであつた。友人の一人が發禁の川柳集をもつて来てくれた。けれども川柳とはほとんど關係のなかつた當時の私には、讀んでみても何の事やらわからなかつた。

ところが毎週私の肩を揉みに来る平田といふ按摩があつて、或日私はその川柳集を膝に肩をもんでもらつてゐたが、どうしてもわからない句に出くはしたので、ために平田君に聞いて

られ、戦争で兩眼を失つて按摩をしてゐるのだといつた。そんな事で私は川柳の外道の方面に少しく智慧を得たので、何かの場合にその話に觸れる事があつたと見え、あちらこちらから、川柳に關する印刷物が来るやうになつた。それは大抵川柳の外道物が多いので、十五六冊になると一括して友人に進呈する事にした。そんなものを川柳だと言つては困りますと麻生主幹から叱られさうなものを、一括して某文藝家に進呈して置くと、その人は非常に喜んで禮狀をくれた。ところが半年ばかり経つて其の文藝家は亡くなられた。私は其の葬儀の際弔文を讀んだりしたが、あとで遺族が故人の書齋を整理すると、とて

も大切な品物のやうに大事にしまつてある一袋の小冊子を見つけた。どんな大切なものかと披いてみると、出て来た、出て来たさつぱりわからないものが出て来た。何だらうと遺族たちが評議してゐるうちに、ふと其の小冊子を容れてある袋の表に沖野岩三郎の住所姓名が印刷してあつたので、早速私の所へ問合せが来た。それは拜借したのか贈與されたのかを問ひに來たのであるが、私は簡単に「進呈したのだから御自由に處分して下さい。」と言つて置いた。あとでさきと其の人の書籍は某大學の圖書館へすつかり寄附したといふ話である。大學では其の川柳集をどう扱つてゐるか知りたいと思つてゐる。筆者—文藝家

隣組

(其三)

横濱 福田山雨樓

東海道保土ヶ谷驛から通動してゐる鐵道職員は時々百人もあると云はれてゐた。元トシネルを掘つた土で埋立てた拙宅の附近は特に多く住んでゐる。僕等の隣組十軒の中で六軒は鐵道、向ひの隣組でも過半数は鐵道と云ふ有様。しかし夫々勤先や勤務時間が違ふので主人同志は一向話合ふ機會がない。これに引きかへ女房同志は國防婦人會や



蛇 筆 雜 蛇

(一の其)

て就に蛇らかすで年巳は年本
(局報編)たしましは類を筆執

蛇

中島生々庵

皇紀二千六百年は「たつ」の歳。私はまだこの「たつ」と云ふものを見た事がないし大阪の動物園にはまだ來てないらしい。皇紀二千六百年は「へび」の歳だが或る階級の人達にはやた

らに嬉しい歳である。ところがこの「へび」と云ふ奴が私にとつては一番嫌ひな存在である。世の中には好きだ嫌ひだと云ふ程度に第三者から見たら滑稽に近いものが時々ある。私の友人に體重二十貫もある大男で鶏——活字の誤植ではな

「へび」嫌ひはまだいくらか常識的な所もあつて十人の中七八人までは同情者或は同意者がある。その肩が広い。妙な所に肩が廣いと云ふ感じを持ち出したものが實は私より十倍も「へび」を嫌ひ「へび」を恐れ「へび」をのろつてゐる友人Sさんがある。十年許り前そのSさんと同じ

研究室で勉強して居た事があるが「指導教授がどんなにイデオロギーを呉れても蛇を材料にする研究だけは絶対に——身を賭してもごめんだ」とよく二人で話し合つたものだ。ところがその頃同じ研究室に冷血動物物ばかり研究して居た他の友人があつたが仕事の順序としてどうしても蛇を材料にせねばならなくなつたがSさんの蛇嫌ひを知つ



77

（L.F.S）

平地の彼方へ

ドーコレタンキ

（原片）

女乙る織機 晴夫 晴岡

曲とんげ原上

ら購買配給所でちよい／＼話合ふと見えてみな内幕をよく知つてゐる。若し夫れ子供同志に至つてはまるで近い親類と云つた恰好で仲よく遊び合ふ。隣組は子供からとても云ひたい風景。

今治 長野文庫

今度市の産業組長に就任した村上健一氏は神明町の大家主さんで月末に家賃を集めてさへ居ればそれでよいと云ふ結構な身分だが、あんまり遊んで居るのも勿體ないとして商工會議所に入り半年ばかり調査課の方で勤務して居たが山口高等卒業と云ふ肩書と手腕とを買はれて課長に榮轉したもので就任後も仲々評判がよい、筆者方の筋向ひに居宅がある、その隣に大澤肇君と云ふ小学校六年生が居るがこれも變り種と云つてよからう、年は十四だが身長が五尺ある、體重が十三貫もある怪童で勿論角力は逆も強い、この間の招魂祭奉納角力には第一校の選手として出場し團體戦で全勝し、個人戦では準優勝戦迄勝ち残つたが惜しくも高一の生徒に破れた、得意は突張りである。又孝行女給と云はれる程の親孝行な女給さんも居る、年は二十三で仲々立派な娘さんです、筆者も多少變人だが隣組では平凡な一市民だ。

てるその友人はなるべくSさんの見えない時間に注射をしたり血液を調べたり気の毒な程小さくなつてSさんに遠慮しいしい研究を續けて居た位であつた。殺風景な研究室にもその單調さを破つて話題の渦を巻き起こす事があるものだ。當時研究室で誰一人Sさんの蛇嫌ひな事を知らない者とはなと思つて居たのにSさんと特に惡意にして居た温厚なTさん丈はほんとうにそれを知らなかつたらしい。この温厚なTさんを利用して惡ふざけを企んだにくむべき一黨が在つた。竹細工の簡單ではあるが眞によく蛇の性能を現はした玩具を而もその蛇を巧みに動かす方法まで傳授して温厚なTさんを介してSさんに呈上したものだ。丁度Sさんは私の隣りで顯微鏡をのぞいて熱心に眞理の究明に努めて居た。そこへ突然Tさんが竹細工の蛇を操りながら「Sさんうまく出来てゐるだらう」と差し出したものだ。その時のSさんの顔付きは實際見た者でないと想像は出来ない「馬鹿ッ」と云つたまゝ自分の顯微鏡は勿論周圍にある兎入れの籠や他の研究者の精工な器具等

一切何もかもが最早Sさんの頭には問題ではない。全く身を挺して大震災を逃れ出た人がこころもあつたであらうところの蒼白な顔貌に萬事休す突と云つたあきらめに似た怒りを現はしながら研究室の出口へまつしぐら。長い廊下を殆んど數丁一瞬の間に突つ走つて居た。

早く我々の口に這入つてゐた珍味だつたかも知れぬ。と同様に若し海鼠が畑の中に轉つてゐたら、若し蛇が壁の上を這ひ廻つてゐたら果して今日の如く酒客を悦したかどうかは確に疑問だと思ふ。

飼蛇に鶏を吞まれた話
櫻川 不水
鶏を十羽以上も飼つてゐるのに、卵は一向産まず、雛鶏は毎日煙の様に消えて行くのに、さては近頃流行のコソ泥かとお首傾げてゐた隣りの大家、或日鶏小屋を覗くと、尻つぽを巻き頭を裂いて、正にひな鶏を吞み込まんとしてゐる腕太の青大將を見付け、日頃の信心も忘れて叩つ殺した暴句、腹内を檢出せしに、何と雛どりが二羽、卵が三個、未消化のまゝ出て來た相な、曰く、このお家は己の年生れにて、大の愛蛇家なりし。

蛇寺

森 半疊

援蔭ルートで新聞種になつてる英領緬甸の彼南港に有名な極樂寺がある。私は昭和二年春詣つたが參拜者名簿に東郷乃木兩將軍の揮毫あるのが觀光日本人への自慢だが本尊佛の肩、掌、膝あたり或は光背、燭台など澤山の蛇が這つてゐるのが實に奇觀であり凄くてとても無碍光の勿體なさかなさうだ。同行の某夫人は失神されたやうに記憶する。蛇からみ居れど釋迦牟尼慈顔なり。

蛇

橋本波夢造

蛇を食ふかと聞かれると十人が十人とも先づ嫌だと答へる。が蛇が若し鰻の如く海鰻の如く又鰻の如く水中にのみ棲んでゐるものだつたら、もつともつと顔なり。

六甲ロープウエーの油差に一人類取りの名人が居るそう、山上驛から登山口驛迄徒歩で各鐵塔を巡つて油を差して廻るのが彼の本職ですが、この往復に必ず蛇二三匹は下げて歸るそうである。

温布にエキホス

感冒、肺炎、肋膜炎、扁桃腺炎、齒痛、乳房炎、月經痛、腰痛、火傷等……は

包裝
一〇〇瓦
二五〇瓦
五〇〇瓦
一〇〇〇瓦



エキホスの好適症にして迅速・確實・安全に奏効し使用法も至極簡便なり

迷信と柳川座談會



醫學博士・民俗學研究家

澤田四郎作

不朽洞會會員

石井白面人

不朽洞會會員

戸田孤篷

高鷺亞鈍

★

麻生路郎

本社主幹

路郎 危険率が高いからでせう。

白面人 〓 ビートル強盗に、何とか言つたナ……。

四郎作 〓 ビス健？

白面人 〓 いやビス健と違ひます

が、何とか言ふ強盗が……さうさう、清水定吉とか云ふ奴が監獄

の中で髭を生やした男から、お前は馬鹿者ぢや、強盗みたいな歩の悪い一日に三十銭位に

かならんやうな仕事をして馬鹿ぢやと言はれたので、それでは

さういふお前は何かと聞き返したら、その聲の男が俺は詐欺師

ぢやと言つたさうですネ。詐欺師だと、搦めば何百萬圓と稼

るが、強盗ではアメリカのギャングはいざ知らず、一日稼いで

も、ナンボにもならんさうです。(笑聲)

孤篷 〓 この邊で、伊東ハシニが出て來まつせ。

路郎 〓 僕は堂ビルホテルでハシニに會つたことがあるが、なか

〓 魅力を持つた男だネ。

身の廻り眩しく教祖
御簾のうち (珍茅廬)

此句で宗教の事を話しませうか

四郎作 〓 面白いですネ。金光教の生神さんがさうですナ。朝

から晩まで、一日ずつと坐つたきりで、水氣がたまり顔は蒼

歸つたを見れば箒も

恐ろしい (古川柳)

四郎作 〓 これや、ユーモアがあ

つて面白いですナ。

孤篷 〓 こんな句、人間の心を朗かにして、面白いです。

四郎作 〓 下駄に灸をするといふのもありますナ。

路郎 〓 長ツ尻の人を歸らす禁厭とは違うが、盗坊が大便をして

……ネ。

四郎作 〓 をう〓、盥を伏せて置くのですよ。

路郎 〓 エツ？

四郎作 〓 それウソコして、湯氣が立つてゐる内が禁厭なんですナ、つまり盥を冠せて置くゝ湯

路郎 〓 三郎亡の日には飛行家が飛ぶのを嫌ふといふやうなことは、斯界の將來に大きな支障を來たすので、迷信打破が叫ばれ、新體制下の當局は、迷信を取締る手段を講じてゐられるらしいが易者などもそれがために恐慌を來してゐるやうです。それで今日は川柳に詠まれた迷信に關する句を拾つて、皆さんにお話を願ふことにいたしました。迷信と云つても一概に迷信だと云つて片づけられぬものもあらうし、又迷信と云へば悪い意味ですが、いゝ意味の迷信？もあるのではないかと思ひます。例へば近頃のやうに人心が

多少とも、あちこちしてゐる際には、決斷力の鈍い人に、あるヒントを與へて良かれ悪しかれ行動をとらせるとすれば、それはいゝ意味の迷信ではないかと思ふ。迷信にも、宗教、曆、醫學、數字、易、加持祈禱、俗説といった工合にいろ〓の方面に行はれてゐるが、こゝでは川柳に詠まれた迷信の句を挙げ、大體さう云つた方面に分類してお話して戴きたいと思ふのです。……。孤篷君、何か句を提出して呉れませんか。

孤篷 〓 それではこの句など、どうでせう。

「渾みたいになつてゐる。
路郎」さうですかネ。
白面人「この身の廻りの句は、
潰されたひとの道とかあゝした
宗教の教祖の事で、眩しくは箔
をつけてるんですな。外觀の見
せかけ、こけおどしですよ。金
光教祖の三代様は、御簾のそ
とに坐つてらつしやる。
路郎「金光さんの悪いこと（本
を聞いて指さす）ここにも書いて
まつせ
白面人「（奮然として）金光教の
ことやつたら、いくらでも議論
するよ。僕は親からの信者やさ
かいにな。
路郎「亜鈍君も金光教や。
路郎「わつはは、あさうか。い
や金光教と違ふけどな、それコ
コ……。
白面人「金光教は日柄方位を言
ひませんぜ。
四郎作「金光教に限らず、一般
に宗教といふことで迷信を語れ
ばよい。（一同賛成）
白面人「若し言うなら、潰され
た「ひとの道」とか「大本教」のこ
とを例にとりませう。
路郎「宗教にその、迷信を排除
する宗教がありますな。
白面人「地獄、極楽かて 迷信
や。
路郎「（逆に白面人の方へ聞き
直り）そんなら言ひますがね。
親鸞上人は念佛して地獄におち

るのか、極楽に生れるのか、そ
んな事は自分の知つた事じやな
い。信じる丈が自分の役。あと
は佛様がいゝようにして下さる
と嘆異抄の中でいつておられま
す。地獄極楽を論じ合つた末、
そんなら見せてやらうと七首を
胸につきつけられて、やつとお
さまつたと云ふ話があります。
四郎作「さあ、そうなつたら佛
教になつてくる（笑聲）
路郎「門徒は日柄方位は言はん
よ。門徒物知らずでな。
路郎「ええ、絶対に言ひまへ
ん。
亞鈍「白面人に向つて「金光教
でも、如何なる智者も徳者も生
れるときは日柄も何も言はずに
出て来て居りながら途中ばかり
日柄が吉いの凶いのと言つて、
人間で勝手なものぢや、と言つ
てますな。
白面人「そうです。死ぬる時か
て日柄も何も言へません。
路郎「あ、そや、鋭々君も今日
の案内の返信に書いて来たアる
ぜ（読み上げる）
金光教でも、日柄方位は観る
に及ばぬ普請作事は使ひ勝手の
よいのが吉い家相ぢや吉い日柄
と言ふは空に雲のないほんぞら
温い自分に都合のよい日が吉い
日柄ぢや如何に唇を見て天赦日
ぢやと言つても雨風が強うては
今日は不祥のお天氣ぢやと云ふ

ではないか日のお照しなざる日
に吉い凶いはないと思へ。
白面人「鋭々さんも屹度金光教
ですな。
四郎作「結局、宗教には迷信が
つき易いといふ事にしたら可い
でせう。
路郎「どんな宗教であつても、
これを迷信として扱ふ愚男愚女
があるんだネ。
路郎「宗教から迷信を排除する
爲に、例へば腹帯をせずに、腹
がだん／＼大きくなつてきても
神様に信心さへしてゐたら可い
と云つて死んだ人もあります
が、これは間違つてゐますな。
白面人「金光教では醫者や薬
も、このお醫者さんで、この薬
で病氣が治りますやうに、もつ
とも効果がありますやうにとお
願ひをするんです。
四郎作「醫者をやつてゐます
と、實際、金光教の信者はよく
判つてますが、××教では困る
んです。吾々でも醫學で治り
きれないものもありますから、
そんな場合は患者に信仰を勧め
ます。そして××教でも信じ出
すと、醫者を断れと言ふんです
ね。それで胸に酒をぶつかけて
肺炎で死んでしまつたといふ
例もあります。金光教の信者は
その邊よく判つてゐて、信仰と
一緒にやつて非常に合理的なん
ですな。

白面人「教會の先生もいろ／＼
ありましてね。教義をはき違へ
て、醫薬を止めさす先生も下つ
端にあるかも知れません。これ
は新體制といふものに對してで
も、間違つて、解釋する者もあ
るのと同じわけです。
路郎「阪大川柳會のK博士が、
雑誌中に「僕はこの頃豪うなつ
たぜ。若い時分には子供の胸の
上に載つてゐる御守
りをバツと除けて診断
したものだ、近頃で
はソツと頂いてから横
へ除けて、それから診
断するやうになつた」
と談されてゐたが……
四郎作「さうですよ、
僕も學校卒業當時はさ
うだつたが、除けて診
断したあとは、又そつ
と載せてあげる。
路郎「ええ、さうでせ
う。そのK博士の話を
阪大病院F内科に入院
してゐられた米本貴志
子さんに談したことが
あつたが、十二月號の
句
お守りを名醫拜
んでそつとのけ
（貴志子
の句が、そんなとか
ら出来たのではないか
と思ふ。

オムニコン

一星 歌文一

（包）
二〇〇〇管入 二二〇〇管入
二五〇〇管入 二五〇〇管入
一〇〇管入 一〇〇管入

東京 大塚 東京

非特異性全免疫元

本剤は非特異免疫學說
に準據して高度の免疫
力を有する異種蛋白、
リポイド及び脂肪を主
体とせるものなり。

（適應症）
感冒、各種肺炎、肺（膿）
炎、扁桃腺炎、中耳炎、直
腸炎、其他各科、急性、熱
性、炎、傷寒性、敗血
性、並に化膿性疾患に對
し廣汎に著効を奏す。

（用法）
注射無痛、副作用絶無、用
法簡單、發効迅速、價格廉
宜。

四郎作「そつとの、せですか？
路郎「いやの、けです。
四郎作「そら、慥かに僕に經驗
がある。實際醫者だけでは治り
ませんネ、治る何かがある。そ
れは宗教です。
路郎「何ものでも科學で解決が
つけば、宗教は無くなるが、そ
うでない限り宗教はなくならん
よ。

孤蓬「一寸位の人は何ですが、本當に科學者となると科學で解決できない何ものかと判るわけですネ。」

四郎作「佐藤さんがさうでせう。佐藤工學博士ネ。」

路郎「あゝ。佐藤つて基督教の信者ですネ。」

白面人「川出美根子さんの母堂のお通夜の晩に某博士から伺つたお話ですが、病氣を治す方法には醫者も宗教もある。但し醫者だけが薬だけが完全な手段とは云へない。醫者が八〇％治せばあとの二〇％は宗教の力だ、たゞ治すパーセンテージが醫者や藥の方が、それ以外のものより多いだけだと言つてました。」

四郎作「宗教は宗教ばかりし、醫者は醫者ばかりではいかん。その抱き合せですなア。」

白面人「そのパーセンテージに就いての面白い話ですが、ある病人の出来た家で祈禱師を頼んで、御加持してもらつてゐる時に、醫者が往診にやつて来たんですな。宗教と科學の鉢合せといふところですよ。ところで這入つてきた醫者もムツとすれば、中に居る祈禱師もムツとした。」

到頭議論になりましてネ。醫者が曰ふのに、若し法の力で病氣を治す事が出来るなら、殺すことも出来るだらう。ではお前は、その法力とやらで祈り殺してみ

てくれ、僕は毒を一瓶盛つて直ぐ殺してみせる、とやつたので、その祈禱師はアタフタと歸つてしまつた。(哄笑)

四郎作「それや、面白い。僕にもそんな経験がありましたネ。」

ある患者の家の前まで行くと、イヤツ／＼といふ聲が聴えるんです。はて患者が、氣でも狂つたんぢやないかと案じながら奥へ這入つてみると白装束をした人が、イヤツ／＼と腹の上に氣合ひかけてゐるので、暫く僕、見せて貰つたが、胃潰瘍だつたものだから手を腹に當て……イヤツ／＼と言つてました

が、家へ歸つてから苦笑した事があつた。(笑聲)

白面人「ところが、あゝいふ加持祈禱で治ることもある。石切さんで腫物が直ぐ治りますネ。」

四郎作「鯉の生血は肺炎に良いといふのは當になりません。大體肺炎は一週間目に熱もぐつと下るものなんですが、肺炎に罹ると、四、五日目位に醫者にかゝり、近所の人なんか鯉の生血が良いと言つて持つてきて呉れるのが丁度、一週間目位になるから、どつと治る。あれは今までに血清學上から研究されてゐますが無効です。つまり偶然の符合ですネ。」

白面人「先生……他の醫者が基礎工事をしてゐて、その間に患

者の方では効果がなないとみて醫者を代へてみたら一服呑んで治つたといふこともあるでせう。」

四郎作「さうです。私の方でも

患者が先生の藥ですと直に治ると言はれるが、その逆も考へられることで、まあそれで損得なしといふことになります。肺炎の患者を他の醫者がみてゐたのを一度往診を乞はれたので診にゆくとき丁度平熱になつて六度八

分しかないのですが歸ると又熱が上つたといふので、再度是非往診に来てくれと言はれるので、もうすぐ熱が分利するから主治醫に見てもらへといふと、家人曰く先生が、家へは入つて來やはつたら熱が一遍に下つたからもう一度やつてきてくれといふ。これなどは先の話ですネ。(笑聲)

孤蓬「科學の到達する限度は、ある程度までしかいつてしまはないから、その間、迷信と言ひきれないです。」

路郎「生々庵氏(醫者)も言つてゐたが、ヒステリーの娘が患家

先にあつて、往診が出来ぬ時には生々庵氏が電話口まで出ただけで、ヒステリーが治る。(笑聲)これなどは一種の信仰だネ。四郎作「僕もそれで言ふんですよ。信用できる醫者を搜せ、そうでない、こつちも不愉快ですからナ。」

路郎「かりに、女中の仕事でも不愉快にやつてゐたら、お茶碗を壊すからネ。」

孤蓬「先生！ 信ずるといふ句

で、良い句がありませんか？ 路郎「あります。それは

信心に嵐のなかをまつしぐら (貽美)

一心不亂前後忘却、嵐の前に嵐を見ずといふ句です。

孤蓬「電車の中で居眠りするといふのは信ずるからですネ。エレベーターでも……。」

白面人「そんなこと言つたら家の中だつて……。」

孤蓬「いや、そうか？ 僕、まへにそれらが信ぜられなかつたんや、神經衰弱にかゝつてたんやて……。」

路郎「同じ迷信でも死骸を曝いて、いろんなものを取り出すといふ迷信はいかん。」

一同「そらいかん。」

孤蓬「極樂は、見方によれば代表的な迷信とも見える

極樂へまだあの人が來てくれず (かほろ)

この句は極樂を信じてゐる例でせう。書にかいた極樂はいはば宗教家の藝術心による創作です。ハレムの宮殿にもなるだらうし、今ならカフェエやダンスホールになつてソプラノを唄ひジャズがきかれるかもしれませ

四郎作「昔、飢饉になれば全國の坊さんが集つて鐘をついたですネ。」

白面人「地獄極樂が迷信である。迷信でないと言張し合つても、行つた人もなければ取り出してこれが左様だと見せるわけにも行かず、これはいつまでも水掛論らしいですな。」

孤蓬「本當を言へば極樂や地獄の存在は、親鸞上人が又出て來ますがほんとうの宗教は科學的で因果に立脚してゐる。不合理らしいこの世の善果惡果はその原因を過去に持ちここの世でのつぐなはれぬ善因惡因が累積して肉體からなはれた業へ未來に於て決算をつける。これが佛教の三世の因果律です。釋迦が四門に生老病死の四苦を發見する前に待場で自分の射殺した鹿の苦しむのを見たのが發願のはじまりだといはれてゐます。私は自分を反省して極樂はとにかく、地獄だけはなければならん様に思はれます。」

路郎「一つ丙午の句を拾つてみませうか。」

丙午半座を分けて五

六人 (古川柳)

之は丙午の女は夫を殺すといふ俗説から、其丙午の女に殺された男達や、六人が半座を分けて待つてゐるといふ句ですネえ。

四郎作「實際、田舎でもさうい

ふ例がありますネ。

孤蓬「丙午の女が死ぬ場合もありますか？」

路郎「そらアある。人間はみんな死ぬんです。(哄笑)」

四郎作「丙午同志では、どうでせう。」

亞鈍「僕の家近く五つになる女の子一人持った後家さんが丙午で、去年、同じ年の主人と三つになる男の子まで一度に死なしました。」

路郎「はーン。僕の知ってる夫婦は、丙午同志ではないが、うまいつてゐるがな。しかしこの迷信の根は實に深いネ。」

四郎作「さうですね。太い根がありますなア。」

路郎「他に、——」

丙午しつかり重荷つ

(古川柳)

けてくる

これは、持参金つきの嫁を詠んだもの、それから

丙午遠いところから結

(古川柳)

納が来

丙午まさか座頭はい

やと言ひ

(古川柳)

四郎作「座頭の句は可哀さうな心情を詠んでゐるんですね。」

路郎「それから、」

大社ただの午には一

人當て

(古川柳)

これは出雲の大社に神々が集つて縁結びをされるのに丙午には

何人か聲さんを當てるが、タマ

の午、即ち丙でない午年の女に

は一人だけ當てるといふ意味

——。これから類推して、丙午

は聲さんを何人か殺すといふ迷信

ですが、これ位深刻な迷信は

ないネ。天明六年(丙午)に、丙

午の迷信で流産や新生児壓殺の

出来ることを豫想して、その前

年に諸人の迷を解かんがために

「丙午のさとし書」が著されたこ

とがある。高島米峰先生なども

丙午迷信打破について骨を折つ

てゐられたことがある。

亞鈍「しかし斯ういふ丙午の悪

い例を取上げるのはいかんです

ネ。

白面人「丙午が幸せにいつてゐる例を挙げたらどうです。(一同賛成)」

から三ヶ月程緒方病院で、講習

を受けて産婆の試験も一遍にバ

スした人です。

白面人「そオですか。」

路郎「結局、丙午の女の人賢

こくて、しつかりしてゐて、男

の方が呆んやりしてゐるんです

ネ。(哄笑)」

一同「それが結論だ。そうく。」

白面人「

鈴をもたぬと追剥ぎ

に逢つたやう(古川柳)

といふ裸参りの句があります

が、なか／＼面白い句ですナ。

四郎作「僕らの子供の時にあり

ましたね。大和初瀬の裸参りで

すが、それが禁じられてからも

やつたので巡査が追つかけて来て逃げたことがあります(笑聲)」

腹痛するのがヤメルとちやんと

使ひわけしてゐます。

白面人「紀州でね、轉び落ちる

のを、まくれ落ちると言ひます

ネ。

四郎作「昔の人の感覚は鋭敏で

すから、今考へれば驚くやうな

句がありますナ。あんな迷信に

就ても色んな禁厭が、例へば鱈

を張つたり、馬肉を張つたりし

て……」

白面人「それは効果ありません

か？」

四郎作「馬肉を張つたりして、

熱をとつたりするのは理窟にあ

つてゐるが、程度を越したらイカ

ンですね。馬肉をピフテキみた

いにして張つてゐるのに合ひました、その頃に一遍分が三

白面人「鱈はどうするんですか

四郎作「いや、それは咽喉が腫

れてゐたので、明日注射せねば

いかんから、氷嚢で、冷して置

いて呉れと言つて置いたところ

、翌日、患者のあごに載つて

ゐる氷嚢をみると、何か、ちろ

／＼音がするので、開けてみた

ら、氷の代りに鱈が入つてゐた

んです。(哄笑)」

白面人「それと似たやうな話で

すが、目に星が入つてゐるのを、

醫學的に角膜といふのか知り

ませんが、川の目高を何匹か

喰つたら可いと言ひますナ。

四郎作「あゝそれは、昔の民間

療法ですね。生きた奴を喰んで

せう。

四郎作「さうです。／＼」。

路郎「数字の迷信へ移らうか。

白面人「数字の迷信では四です

ナ。

四郎作「官立の病院でも一二、

三、五と飛んで四號室がありま

せんね。

路郎「どうも日本人は四を死に

かけて忌み嫌ふ。それに七に九

など。

四郎作「なんでも、ないんです

がナ。

白面人「支那語でも（指を折つ

て）一、二、三、四、か、四は

スウと發音しますネ。——そう

か、死もやはりスウで四聲は違

ひますが發音は一緒です。

孤蓬「支那では龜やすつぽんを

嫌ふのは何故です？

四郎作「それは、何か淫靡な意

味になるんでせう。性慾的な……

白面人「大體、スツボンや龜の

ことを俗に忘八と言ひます。す

つぽんや龜は自分の母とでもつ

るむと云つて極端に嫌ひます

ナ。だから普通支那人は、畜生！

といふ時にツンバと呌鳴ります

ネ。忘八の八は里見八犬傳で仁

義、禮、智、忠、信、孝、悌と

いつた八徳の玉を八人の豪傑が

各自持つあれですネ、つまり人

間の八つの道徳を忘れた奴とい

ふ意味で、日本の畜生！と同じ

ことになります。もつとも吾々

がコン畜生と云ふ、あんな軽い

意味でなく、支那人が忘八と云

ふのはもつと非道い意味で、あ

の氣の長い支那人でも忘八と云

ふと殴り合ひになりますからネ

四郎作「それから、エロ的な意

味があつてネ。支那人は行ふこ

とが好きで、口にする事が嫌ひ

だ。（笑聲）

白面人「日本人が支那へ行きま

すね。スツボンを握まへて來て

箸を前へ持つてゆくと、くわつ

と噛みつく、その唾へたまゝの

箸をぐつと引くと、スツボンは

却々えらい力だね。男一人の力

ではなかなか首が延びません。

まあ二人がかりで一人はスツボ

ンの甲羅を踏むまへて、もう一

人がその箸を引つ張るとやつと

首が延びます。延びたことを包

丁かなにかでチョンと切つて、

タラ／＼落ちてくる生血を吸ふ

と、支那人は目を廻してしまひ

ますよ。（笑聲）

四郎作「あの生血は良いんです

ネ。耳の悪い人はスツボンの小

便を入れると治るさうで——笑

聲——それ程精があります。ス

ツボンの句ありますナ。

路郎「あります——

すつぽんに拜まれた

夜のあたたかさ

（古川柳）

これは先の話のやうにして、ス

ツボンを料理するのであるが、

その時、首をさしのべた姿がい

かにもいのち乞ひをしてゐるや

うに見えたが、それを喰べた夜

は實にあたたかい。といふ句意

孤蓬「次ぎはお化けの句ですが

猛烈に化けてお岩は

祭られる（句樂）

といふのがあります。

四郎作「要するに祟られるから

ですネ。

白面人「お岩は怨念ですナ。怨

念の句では

怨念を質屋構はず蔵

に入れ（亂三）

がありますネ。（哄笑）

四郎作「昔と今の動きがあつて

なか／＼面白いですネ。

白面人「コレ丈せち辛うなつて

るんです。（笑聲）

四郎作「流れたら餘計面白い。

路郎「幽霊の話では菅原道眞の

幽霊には立派に足があります。

それから足ばかりの幽霊もあり

いろんなのがあります。

白面人「火野葦平の「怪談宋公

館」の中に、金貸せと言つて出

てくる。

路郎「金を呉れる幽霊も出てく

るよ。

孤蓬「その金で女郎を買ひに行

く……」。

白面人「コレ！コレ、おきに話

をそんなとこへ落したがる（笑

聲）蛇は煙草の脂が一番嫌ひや

さうですネ。それである日人

間がお前の一番嫌ひなのは何や

と訊いたら、蛇は煙草の脂だと

これみたか！と金を仰山抛り込

んだから一邊に金持になつたと

云ふ話がある。（笑聲）——それ

から落語にありますネ。一番恐

い話をしやうといふことになつ

て、ある男は越中褌に十銭褌を

つけたのが一番こわい、こんな

こわいものはないと言つた。否

その硬いと違ふ、一番恐ろしい

ものやという、そんなら饅

頭やと答へた。妙なものが怖い

なア、調伏してやらうと饅頭を

その男にあてがつて、障子の隙

間から覗いてみたら、恐いどこ

ろか、ムシヤ／＼一人で食つて

ますワ。（笑聲）——呆れて

おいはんまに怖いのは何やと訊

いたら、こんどはお茶が怖い……

（哄笑爆笑）

四郎作「逆効果だ。世の中はこ

の手でゆくんですな。

路郎「新體制もそれでゆくか。

白面人「この頃、お酒の怖い人

が多い。（笑聲）

孤蓬「わあ、仰山あるわ。米が

怖い。醬油が怖い……」。

白面人「（四郎作に）先生……祟

りも迷信ですナ。

四郎作「さうですな。僕ら怖い

から信じてゐますがナ。

路郎「

かしわ屋の女房にな

つたおそろしさ

（毒仙）

といふ句がある。

孤蓬「僕の中學時代の同期で×

つて、歌うたひになつてイタリ

ーへ行つて勉強し、歸朝してか

ら一遍に有名になりましたが、

その家が衰へて、代替りになつ

たのも俗にいふたたりとでもい

ふのでせうか。迷信だと云へば

迷信ですが……。といふやうな

例もあるので、かしわの女房

が、なんだか怖しくなつたとい

ふ句の深慮さが思はれます。

白面人「今、孤蓬君の話された

×××は、この住吉に居たんで

すよ（白面人も亦住吉の住人）

僕らよく知つてゐるけど、先生

！今日驛から通つてきた道に、

南海といふ料亭があつたでせ

う。あそこがもと「鳥××」と言

つて、××の親父がやつてゐた

ですよ。今のやうにラヂオなん

かで聲が普及されてゐなかつ

たので、××が家で歌ふアアア

ア（咽喚ぶのはせめてみる）が近

所の頭痛の種だつたんですヨ。

今はそのアアアを金を出し

て聞きにゆく時代になりました

がその時分は隣りでは（廣田

屋のこと）都々逸なんか歌つて

ゐる、こつちでは××がアアア

アやつてゐたんですからネ。

近所はとて迷惑がつたもんで

す。

四郎作「これや面白いですネ。

歴史として記録に残して置く必

要がある。

路郎「今日は非常に面白かつた

てんでに喋つたので筆記もと



蛇 雜 筆 (其の二)

蛇

小山 文三

蛇穴を出てけり空の一碧にといふ送別の一句を畏友丁氏から頂いて、此大阪に來てから既に二十有餘年になる。恰も其郷關を出たのが、己の年であつたのを思ひ出す。

それから今年で三度目の己の年を迎へて今以て穴を出る譯にも行かないのを嘆じて、もうどうにもならないのである。

只老眼鏡の年と共に度の強くなる事と、白髪が殖へる事と、人並外れて愚痴が言ひ度くなる位を自覺するだけの事である。

蛇は私は怖くないが愛撫する程に可愛いと思はない。夏の野原で見附けた蛇の尻尾をつかんで振り廻して遠くの方へ抛る位の盛當は今でもやつて見る自信がある。

南洋で大きな青大将のドクロを巻いてゐるのに遇つて、其落ちつき拂つた不遜の相好に一種のにくらしさを感じたり、滿洲のさる禪林の境内に飼つてある多數の蛇が四月の空まだウッ寒

いのに、呼べば穴から出て來て物欲しげに人なつかしい姿を示すのを可愛く思つた事もある。

肋膜を病んだ娘が誰れしも嫌がる烏蛇を焼いて食つたり、其血をすすつたりまでして、其恢復に勉めてゐた事を回想して人間の生への執着心の偉大さを知つた事もある。

信州の飯田の料亭で珍しい料理が出たが、それが蛇と蜂の子だつた事を教へられて驚いた事があるし、廣東で悪友達から蛇と蛙の料理を喰はされて、これが廣東の鶏料理ですかとの愚問を發して笑はれたりした事もある。

蛇の皮のステツキ、これの弗入れなぞを愛好する人々はまだしもだが蛇腹のクリカラ紋々に至つては随分惡趣味だと思ふ。

大明神緣起

小畑自由朗

家の横手の柿の樹の天つべに白い腹を見せて蛇が巻きついてゐた。暇つぶしにボカーアンとしておつさんが見上げて居ると「何んだんね」と通り懸りの人達が立止まつて「白蛇や」と云ひ出す者が有つて「えらいこつちや」と近所の人達が騒ぎ出した。

かくて柿の樹に注連繩が張られ、御厨子がまつられ名も白蛇大明神」と、爾來十數年、この大明神さんはます／＼繁昌して、柿の樹の持主に小作百姓も止めさせて、「墨色判斷」なんか

をやらせながら氣樂に暮させて居る。

蛇

佐々木三福

世の中に蛇位人間から好意を持たれぬものは無からう。それだのに十二支の一つに加へられてゐるのが不思議だ。蛇となる

と僅か一尺位のやつでも、一寸もある錦蛇と言ふやつでも、一目見た瞬間にたれでもゾツとする。蛇に對する感じは子供でも同じと見えて、田舎道などでニヨロ／＼と小さい姿を見付けると、ソレツと竹切れなんかでぶんなぐられて伸されて仕舞ふ。

罪な話だが蛇の場合に限りそれが當り前の様に思はれてゐるのは不思議だ。所が近年は蛇が精力素として用ひられるようになつた。〇〇酒など銘打つて婦人などにも用ひられてゐるそう

だ。今年はず度其蛇の歳だ。二つ之でも飲んで新體制發足の轉換期を甘く乗り切る事しよう。

蛇

丸尾潮花

二月の星の綺麗な夜の想出夢の小徑の月見草を摘んで居ると

無數の蛇に取り巻かれた。一生懸命に逃れ様とする私の右手の小指に一匹の蛇が飛び付いた。瞬間私の眼が覺めた。するとどうでしょう、右の小指から手の平へ黒い血が流れてゐた。針で突いた程の傷跡も見當らない恐い夢、あれから私は如何なる場合でも御婦人から戴いたお手紙は一切焼かない事にしてゐる。

蛇

戸田 孤篷

蛇を巳と云ふ字に書くことと私に親父のあたり年になる。不思議にも母と妻とが各四つ違ひで酉年。親父は孫に竹の蛇をつきつけられたり、ペロペロ舌を出されてもむきになる程大の蛇ざらひ。私は蛇は差程でもないが鶏は苦手。理由はあの無表情な羽根、爪、嘴。伊勢大廟の白い鶏に隊列を亂したことがある。あ

改名廣告

蛇の唇改メ

矢野 赫堂

蛇と言へば女房が蛇年の爲か少々執念……其んな話は別として蛇の腹はよく蛇の鷹とミスプリントされて、どちらが執念深いのやら外から見たら解りにくいと言ふ處今回五健御大の姓名學より赫堂と改名致しました。よろしく御風交の程を。

新しい經濟理念に即して

最も眞摯なる百貨配給機關として 意義ある使命の達成に 精進致して居ります



大丸

月曜休業

大阪心齋橋



柳川 世界史 (I)

戸田 孤 蓬

(一) 史前史

宇 宙

天文學者ならずとも、秋夜を仰ぎ撒きちらされた瞬く星の一つ一つが、あるひは太陽の幾層倍の大きさを持ち、何千何萬光年の彼方から光を發してゐると知らされた時、生命と宇宙の問題に觸れるとはなしに觸れてみたくなる。

月は人間共の興亡史

喜怒哀樂さてめいわくなお月様

倍幸と一緒に宇宙ひろくなり

壹拾百仟萬億海王星

地球の歴史

太陽の八つの眷族の一つとして我等の地球が生れたのは

前人たち

猿が人間の先祖か、同じ先祖から分れて来たか、とにかく拾萬年乃至十五萬年前には曙人と云ふのがあらはれた。人間が人間らしくなつたのは完全に下肢で歩行出来る様になつてからである。もう／＼の生物に比べて、生のまゝでは戦闘力も防禦力も比較的弱はかつた前人達は、手持無沙汰の二本の手で火を作り、武器を作る事に成功した。住居に選んだ洞穴の壁に生活記録さへ描き残す事が出来た。

禿鷹といつしよに死體攫しに出

洞穴の壁畫以外は大風

原始思想

智識は經驗によつて生れる。子供は神祕的なもので満足する。眞の理性が芽生へれば神祕と智識を判然と區別する事も出来る。原始人が萬神の信仰によつてひたすら自己の生活の安全を祈つたのは當然である。

天狗さんごさるて鬼のつく話しめ縄はとにかく神のあますとこ

熊祭り神様として殺すなり

桑山子祭神主うっかり笑はれ

僧上の催眠術は見破られ

蛇 毒

柳 秀 長崎仙太郎

蛇毒の研究は相當古く本邦でも三四十年來のもので其毒素は主に蛋白性狀を持つものと配糖體等で就中神經、血液、血管内皮、肝、腎、睪丸、卵巢の諸細胞、精蟲、細菌、及筋纖維等を溶解する作用最も顯著でありますが動物に蛇毒を反復注射すると自然に其血清は能く解毒的作用するに至るものです。生物學的の研究資料となつたものは臺灣地方の青竹絲、龜殼花、百步蛇、雨傘節、飯匙倩(台灣こぶら)大島琉球の飯匙倩、内地の蝮蛇等でありますが蛇の種類は世界中では約五百七十七種本邦領土内だけでも二十七種程あるさうです。

蛇

高橋かほる

蛇。くちなわ。(己さんかて)大嫌ひでした。が明石の海岸近くの草むらに抱擁のくちなわを見てより、それまで持ち續けてゐた蛇への恐怖感が淡くなりました心臓が強くなつたのでせう。

蛇

鈴木九坡

或る夜蛇の夢を見た。大體蛇

蛇

岡田 某人

薔の棘を縫つて叢を出た蛇は緒土の色に駭いた。太陽は金の粉を撒きちらし崖の下では波しぶきが高く上つてゐた。海の青さ。

あゝこの土もこの太陽も、この海の濃さも、總ていつかイヴと一緒に見た時の儘だと、蛇は思つた。

——ボーロに誘はる。

吾人と川柳

松島みどり葉

川柳を作つてゐるといふだけ

牧畜時代

弱肉強食の自然界の原則に従ひ、各自の作つた器具の力をかり、水邊に釣り、山野に狩をする。人口の増加は計畫的生活手段の確保にせまられ野獸を飼ひならし、必要に應じてその皮を、肉を利用する事を覺えた。家畜は主として草食であつたので綠草を追つて一所不住の遊牧を續けた。

農業時代

個人主義守つて羊飼つてゐるジブシーの先祖も盗み知つてゐる。かたつむり笑ふな俺は遊牧者

集團生活がはじまると土地が意識の上にのぼる。植物性食物は野草でこと足らなくなつた。世界各地の人類が土の幸に恵まれはじめた。土の神祕は祈ること、祀ることを益

々盛んにさせた。同時に數學天文學等の科學の先驅も必要にせまられてあらはれる。日本では土地柄から牧畜時代を經ずして農業時代に入つた。生きながら神にしろれた不倖あの星が見えると種を蒔きはじめ智慧の實をたつた一人てしまひ込み

こんなのも喰へるが夢の一握り

隣組

(其の四)

下關 多田市多樓

客二人三日泊つて米を借ると、言つて別に働きが鈍くて米がないのぢやない。明日にもなれば米は取る事が出来るが切符制のお蔭、今日の日が舞へぬ、さあ、さうなると有難いのは隣組で、何時かの話に、いざと言ふ場合はお互ひに助けふべき

大府府柏原町 宮岡白峯

夫婦喧嘩の仲裁から豆炭の配

ことと規約が出来てゐる。だからと言つて他人の米櫃まで、當にする譯でもないが買ふべき米がなければどうにもならん(切符制と隣組借る方は平氣、貸す方は親切。昔たれか言つてゐる。『遠い親戚より近い他人』と、實にうまい事を言ふたものだ。

給といろんな役割のある隣組、横から見れば面白い、從から見ればバラの如し。裏から見れば涙が出る、時局は既に四年だが未だに認識せず、米、炭、砂糖を筆の中へつめ込んで臣道實踐の音頭をとる。之が日本人かと思ふと涙を流さずにはゐられない。バット一本十六人で喫ふたあの時、二十人あたら二十人で喫ふ、それが嬉しかつたことを思ふと。

壽 興亞聖春

昭和十六年元旦



新體制下の
初春を迎へて

謹みて國運の彌榮えを
壽と奉ると共に本年も
倍舊の御愛顧の程偏に
願上げ奉ります



資用向百貨店

松坂屋

大阪・日本橋

蛇

北川 春巢

蛇は私の最も氣味悪いもの、一つである。

私達醫者は病人と關係が深いもので、從て又死者とも關係深いと云へる。私は病人を氣味悪いなどと思つた事は今迄嘗てない

時局柄、蛇の世界でも冬眠に土の中へもぐる等は支那の眞似みたいて面白くないと、春から特越の石垣の上へ蛇毒の蔓かなんかで蓋を作つて冬を越すことになつたが、サテ又春が來て氣がついてみたらミもフタも無くなつて居たと云ふ話。

ではなにもならないのである。生活即川柳とは誰れも言ふ事だが吾人は之れに尙、川柳即宗教と加へたい。

生活即川柳、川柳即宗教、宗教即生活とね。以上相離る可からざるもの川柳によつて自他修養をこそ望ましく川柳をなぐさみものにする輩らのあるをなさけなく思ふものである、心ある士よ作句と共に修養に心がくべきであるまいか。

蛇の新體制

正本 水客

いし、又死者をも、それ程氣持悪いと思つた事はなかつた。尤も私達の取扱ふ死者はまだ冷え切つてゐない、息でも吹き返しうなのが大部分である。

最近、蛇の冷たさと屍體の冷たさとが丁度同じだ、と誰かに聞かされて以來、死人が妙に氣味悪く思へ出した。こんな事でこれから先醫者が出来るだらうか？

近作柳樽

麻生路郎選

床しきは和綴ぢの本に銀杏の葉和歌山 秋月宏方
 身の不運皆薄情な人に見え 同
 今ならば清正部隊長で征き 同
 乗替だ新體制の驛が來た 同
 植木屋が來る用もなき家に住み 同
 勿體なく溢るゝ風呂に身を沈め 同
 洋服屋お尻の寸も取つて置き 同
 いさゝかな望みに生きて鶏を飼ひ 同
 縁談へ可笑しい程に姉沈み岡山 生子洋子
 肩にかけ手にかけ晴着眺められ 同
 ふり向かず來る足音を待つてゐる 同
 妹に兄は教へぬ詩と夢を 同
 子の去んだ廣場は繩の落ちた儘 同
 この手紙行く地もこんな夕焼か 同
 わびしさは笑顔を作る事覚え 同
 マイナスだプラスだ弟の學期末岡山 本田ユリエ
 情熱は靜か洋菓子つゝいて居 同
 汁粉屋を制勘で出たタイピスト 同
 蠅追つかけて女事務の暇なこと 同
 三等郵便局愛嬌のない娘がつとめ 同
 錠劑を嚥んで事務家の晝食終る 同
 濟世醫だかそんなにも腕はなく 同
 どの音で切れたか車掌有難う伊丹 酒井美知夫
 合トンビの惨めさ手錠がかゝつて居 同
 鼻糞をうつかりほじる女事務 同
 男の子片袖持つて歸つて來 同
 年よりの氣嫌娘のむこを褒め 同

二階借り炭を貸したをおぼえて居
 某アパートにて

まだこんな品が賣れるか飾窓廣島縣 佐原町 西野みづほ
 卒業の希望を訊けば軍需工 同
 平凡な一生だつた靈柩車 同
 と言つても電髪すぐ伸びず 同
 痰壺も洗ひ元旦待つばかり 同
 三ヶ日せめて子供を叱るまい 大阪 吉川琴聲
 三十に近く今年は嫁くつもり 同
 大小屋へ正月と言ふ陽があたり 同
 所書きバツトの裏へ書いてくれ 同
 十二月こゝにも書いた火の用心 同
 古本がいゝ値に賣れた十二月 大阪 夷 一笑
 仲人へもうこれきりの歳暮する 同
 妻子ある君でつちりはよし給へ 同
 鷹の爪みづやの奥でわすれられ 同
 大晦日洋酒だつたら有ると云ふ 同
 食量の不足佛も知り給ひ 布施 小谷華素兒
 ぼろタクシーでも有難く順があり 同
 酔ふ客もなく仲居はもの足らず 同
 そんなのが男心と言ひ聞かせ 同
 鎧戸がまだ下りてゐる貴金屬 同
 女中難こちらが我慢して使ひ 布施 原田輝親
 旅想ふ 同
 旅想ふ貧と忙との此の頃に 同
 最低の保證豆炭配られる 同
 下駄穿きは後の列で撮される 同
 淑髪と名をかへ型を少しかへ 同
 半日をうつかり本と居た寒さ 松江 松崎専太郎
 それからのもんべ自轉車稽古なり 同
 親ほどの人をうれしがらせて使ひ 同
 あんな娘が鳴らす琴とは思はざる 同
 時間まちして酒好きとみられたり 同

漢字の異

國地名

古川風竹

「甲谷陀とは何か」といふ試験問題が出たとして、頭をひねらずに「印度の商港カルカッタなり」と答へ得る學生は少ないだらう。日本郵船の案内記にはいつも使用してゐる文字ではあるが……

日本人が用ゆる異國地名のほとんどは、カナ文字のない支那人の選であるから、日本人には讀みにくい、アテ字のやうなものばかりだ。使ひ馴れて餘り目障りにはならぬが、埃及（エジプト）諸威（ホルウエイ）伯刺西（ブラジル）など、随分ひどい讀ませ方ではある。

私の寡聞かも知れぬが、日本では公私ともに西洋の地名を漢字で書くか、カナを用ゆるか、統一も標準もないやうだ。近頃はカナ書が多く見られる。それでも「倫敦大使館駐在ヲ仰セ付ケ」られたり「ニューヨーク支店詰」を命ぜられる。

異國地名も中華製のみでなく和製もいくらかある。中でも「浦塩」などは痛快だ。米國（支那人は美國と書く）太平洋岸諸都市の漢字名はみな和製及び在米邦人の手製である。桑港（サン



二台曳き出来る自轉車屋の娘 松江 梅本登美也
 粉吹雪まともに驛長代理ゐる 同
 醫師の門硬く夜中の手が凍へ 同
 病院へさても女の着飾つて 同
 藥効かぬ話炙點控室 同
 眼鏡越し孫の遊びを危く見 尼崎 小林文月
 鎌倉溪より有馬(十一月)
 青年は紅葉も観ずにいそいでき 同
 消炭にキャンプの名残とどめてゐ 同
 逆コース三人組はちと疲れ 同
 おくれたが景色眺めて居ると言ふ 同
 妾宅の電話を名刺には刷れず 山口縣 三原狂路
 仕事したことの無い手でみかんむく 同
 容赦なく女の見舞よく喋り 同
 アパートに住んで金糸の帯ばかり 同
 貧乏のまだまだ食へぬ日とてなし 同
 月給十五圓の頃の寫眞見せ 松江 田中都之介
 支那に居た頃の寫眞の泥鰌髭 同
 面目と云ふものがあつた女子大出 同
 うちの子も障子を破りますと賞め 同
 隣から來た様に云ふ協和服 同
 庶務係一向出世もせず老ひ 大阪 谷口寒草
 羽織着て病人ボストまで歩き 同
 えげつなく儲け妾に氣前よし 同
 手紙出す先あり心にぎやかさ 同
 約束の場所でなくなつた飾窓 姫路 小川靜觀堂
 指に巻き巻きぢれてゐるハンカチ 同
 時効とはおもうてみてもあの金が 同
 お客さまはお白いですネと手を比々 同
 二重顎節米食をうたがはれ 大阪 橋本美奈子
 親が嫁もらうでないによりすぐり 同
 背景は好いがピンボケばかり撮り 同
 厄除の寺から寄附の十二月 同

殘業の空を飛行機西へ飛び 角野町 在間小樓
 相談をすれば野心はくづされる 同
 向ひ風モンベの女シャンと立ち 同
 三十になつたに職をかへる氣か 同
 母が來て昔話をしてくれる 東京 森本秋子
 縁談のことを母親思ひ切り 同
 待つてゐた便りシートの下へ入れ 同
 動力はまわる首きる人も有る 廣島 大山露斗
 西園寺公の國葬
 悼む日の今日の國旗に風もなし 同
 父の七週忌近し
 信用が地におちますと云つた父 名古屋 松井靜子
 二階から隣家の秘密見て了ひ 同
 風除けて寫生の子あり日曜日 同
 裏二階借りて女給の母子住む 同
 百點を採つた子供に隙が見え 岡山縣 内藤紫翠
 味噌汁の湯氣にもあつた幸福よ 同
 新大使懸望もだし難く起ち 同
 病める子へ初日の窓を開けてやり 丸龜 馬場浪二
 慰問文切手の糊を確かめる 同
 紅茶をば二つ並べていゝ話 同
 信仰の力習はぬ經も讀め べいオク 須藤柳村
 新學期張切る心寝顔にも 同
 先生が一人代つた休暇明 同
 胃袋で酒は炎と化して來る 松山 芝田靈子
 ライオンの咆哮に似て陽がのぼる 同
 オルガンの様に齒醫者はおさへて見 同
 作業服お前の母と嫁がある 京都 小坂ふじ彌
 聴診器不幸な人と思へども 同
 縞ズボンつらいお金を工面する 同
 勵ましてくれる合格者へ笑ひ 神戸 卑上一扇
 好きの道故に下つば斬られてる 同
 窮狀へ鯛の時價を子等も知り 同

フランシスコ、櫻府(サクラメ
 ント)王府(オークランド)珊
 港(サンビドロ)、休市(ボート
 ランド)沙港(シアトル)など
 が其類例である。この中には置
 ケ關の公用文字になつてゐるの
 もある。

ルービヒザア

大日本賣賣株式會社

映畫の都HOLLYWOOD
 をよく聖林と書くが、あれは字
 義の誤譯である。HOLLYは
 柵HOLYなら聖である。柵林

とすれば正しいわけだ。あの邊
 の開拓時代に土地會社が柵が多
 いからホリウツドと名づけたま
 だ。

異國地名の支那製のみつかし
 いものを教へることは國民教育
 の上にどうかと思ふが、私共新
 聞人には漢字は便利である。見
 出しにサンフランシスコやフ
 イラデルフィアは困る。桑港、
 費府と書くのが簡潔でよい。



晩酒廢止妻の同情叱りつけ 江島根 矢田 藤澄
 晩酒廢止三體千字文を買ひ 同 同
 行きすぎの是正さ困らすつもりない 同 同
 丸顔の丸刈に見る圓滿さ 岡山 岡 眞理子
 死金の嵩がブルジョアらしく見せ 同 同
 二零が零空の財布が二つある 同 同
 大君に捧げまつりて強い母 大阪 平川 久枝
 入營の舉手へ母親小さく立ち 同 同
 乗合ひを待つ行列へ課長もゐ 同 同
 好きですと云ひきる程の娘でもなし 大阪 青野 花笑
 相談はするが本心まだ言はず 同 同
 生きていりやあの娘も今年二十一 名古屋 鈴木 可香
 隣組ちつとも慾にこだはらず 同 同
 電事故我が家へ曲る道にゐる 同 同
 入營の祝辭直々社長立つ 同 同
 飲みほした茶碗の温くみ抱くも冬 大阪 今西 鼓慈
 いまとなほ記憶の母は若かりし 同 同
 嘆き聞く女同志の肩と肩 同 同
 教へ子の感謝へ我の小さすぎ 愛媛縣 米澤 曉明
 貰ひ乳母は子供へ詫びつづけ 大洲町 同
 かくれんぼ見つけられないつまらな 同 同
 依願免官校長夢にみて 朝鮮 小林 ヒデヲ
 淋しさは自分一人にランプの灯 同 同
 校長の立場正義の鉢をさけ 同 同
 かはいそうに菊をあんなに曲げつて 廣島 清田 田鶴子
 新婚の眞面目な顔してたづねてき 同 同
 女事務課長と豆を分け合つて 同 同
 負けぬ氣をなだめて軍醫さん静か 東京 田中 青風
 洗ひ髪軒の西陽も大切がり 同 同
 覺めた眼を眩しがらせて窓の雪 同 同
 戦争を怖れ結婚日に五百 布哇 長谷川 猿吉
 二羽居れば夫婦と見なす氣の若さ 同 同
 徴兵へ他國の者も用捨無く 同 同

穩便になぞと男が云へるかい 平北 高原 恩源太
 値切る世話いらなくなつて皆高し 同 同
 輸入した智慧で指導者まくしたて 朝鮮 村野 東狂子
 新體制未だく金が光つてゐる 同 同
 新體制 同 同
 休閑地坊やも草をとると云ひ 大阪 丸島 利生
 満ち足りてお寺に通ふ父と母 同 同
 外交員手品の種を覺えたり 大阪 加藤 ライト
 病氣では死ぬなと父に勵まされ 同 同
 秋の雨モンペをはいた知事夫人 松江 龍光 寺 豹
 神田ろ山愛飲と云ふものを飲み 同 同
 耳くその大きさを云ふ風の夜 大阪 津路 紅多呂
 水入らず隣組からうらやまれ 同 同
 買溜めがありそに藏がならんでる 大阪 山本 葉光
 湯たんぽを入れると猫が来てあま 同 同
 兄弟だからでは済まぬ錢のこと 大阪 朝野 久人
 うまいこと傳ひ歩きも鼠の仔 同 同
 尼僧だと氣付く紅緒の下駄を履き 島根縣 石丸 順子
 萬歳へ妻も覺悟の聲となり 同 同
 よいか妻男ひと度征くからは 大阪 戸奈 巳之介
 餅を搗く夫ニユースで見付けたり 同 同
 繁榮の店に愛想のない主人 尼崎 奥田 綠翠
 この年でモンペ穿くのと笑ふ母 同 同
 母の乳のみが貧富の外にあり 岡山 森本 素木
 辻易者新體制のそとで食ふ 同 同
 バックして我家へはいる三輪車 名古屋 八幡 勿來
 坊ちやんに女中ほんまにだまかされ 同 同
 くつろいで社會面から目を通し 長野縣 佐二木 千隈
 二タ田圃越えて田舎のとなり組 上田 同
 落ち穂拾ふ兒等の意識も統後陣 岐阜縣 藤井 八路
 前置が長く遅刻のくどい事 那加町 同
 それからは御隠居モンペ脱がぬなり 大阪 古野 伶人
 満員車押しては來ても女の子 同 同

厄介な文字だつた暹羅(シヤム)がなくなり「泰」と改まつたのは文選小僧を喜ばせるのみではない。しかし、日本は今後とも支那製の地名を用ゆるか、カナに改めるか、日本独自の漢字を選ぶか、新體制下の小問題として一考を煩はしてもよい。私どもの住むハワイを布哇と書くは和製である。ハワイの島々には馬哇(マウイ)加哇(カワイ)尾亞府(オアフ)などがある。布哇が往々爪哇(ジャバ)と間違ふので、近頃は「ハワイ」と書く人が多い。

街に住めば

高橋かほる

およそ街の暴君の如き存在のトラックも嫁はんの荷物を積んで唐草模様のもよぎのゆたんを掛けて紅い紐のゆれてるのはい一寸好いものです。

田舎に住めば

姫田夕鐘

國策劇の中狂言が幕になると羽織袴で座長が現はれ高うは御座りますのの前口上よろしく切狂言の華やかさを述べ終ると、さて役者衆の白粉の時間を拜借致しましてと取り出した品はなんと蝦蟇の油、その效能を香具師そのけに捲くし立て大は五拾錢小のけに捲くし立て大は五拾錢といふ。控の女優通に目配をする品物を運んで来る。それが又よく賣れること——旅役者も藥の商もやらねばならず並大抵やないと思はされた。京の顔見世を忍びつゝ尖りたる師走の月と歩んだ。

刀 雜 記

萍 花 生

おん心鍛へ直して袖ヶ崎
高輪に筋目正しき刀鍛冶
江戸隠居とは全くの附焼又

以上の句は、伊達騒動、戯曲『伽羅先代萩』で有名な仙臺城主伊達綱宗と交渉のある、従つて傾城高尾とのいきさつが主となつてゐる数多の古句のうちから刀剣に縁のあるものを拾つたものである。

綱宗はこの騒動後、病身のために大國を治め難く候といふ理由で、隠居を願つたのであるが實は蜚居を命じられて伊達家の下屋敷に謹慎したのである。その下屋敷は袖ヶ崎（大崎の東方、白金猿町の内にあつたから、高輪方面である）に在つた。綱宗は通憲を命じられた身でありながら、依然豪奢な生活を續けた。また器用な質で、書畫にも巧みであり、殊に刀剣を愛好し、慰みに自ら力をも打つたのである。尤も大名連の鍛刀といふのは、大抵焼刃渡しをする程度であつた。綱宗の相手を勤めた刀工は、お抱へ刀匠初代安倫である。同匠は、新刀中最大業物の一つで、虎徹を凌ぐといはれる刀を打つた大和守安定の門人であつた。但、綱宗作刀といふも

のは現存してゐるか否か不明ではある。その他武將大名で作刀したうち特筆すべきものとして、古刀期にありては「武家打」の名のある赤松一門の鍛刀があり、赤松則村は刀工名を政則と稱へた（現在刀は数振りあり、珍重せらる）。又新刀期には肥後の領主細川三齋がある。三齋の茶道と美術に造詣深かつたことは周知であるが、同時に刀剣並に装剣具にも癡り、その鑑識眼には驚くべきものがある、そして自ら鍛刀もなした。「藤原包永」と稱する作はその戯作であると傳へられる。又新しい所では水戸藩主徳川齊昭が作刀した。その刀の地鐵に色の異つた鐵が交つてゐて、その文が恰も雲に似てゐるので、「八雲鐵」と稱するのである。東郷元帥に凱旋祝として徳川慶喜公が贈つた八雲鐵の烈公自作刀は有名である。

この慣れない人に屬するわけである。所が、さすが研師の娘だけあつて、刀の取扱に慣れてゐるから、抜くのは巧いものである。それが刀と縁の遠い女であるので、憎らしい感じも起るわけである。平凡な句であるとしても、よく實感が出てゐて、聊かも作意がないのが嬉しい。

以上の記述により前掲三句の句意は自ら分かつと思ふ。序に、四、五句刀剣に關するものを挙げる。

研屋のむすめ憎らしく抜く刀を抜く手際には無論巧拙がある。慣れた人は中身と鞘と摩擦させず、一息にすりと抜くもので、慣れない人には出来ない藝である、そして一般に女は

息をかけぬといふ心掛の誇張した表現ではある。

自害する利益ともなれ
太刀の梵字

刀剣には梵字を切つたのが相當ある。これ等の梵字は五大尊、大日如來、摩利支天、愛染明王、聖觀音、文殊藥師如來等を表示するもので、刀工の信仰を表現する一つの手段でもある。同じく自害に用ひるとして、大日如來の梵字を切つた刀は通常隨がある。

本句は前句の意味を積極化した類句と見做される。『かんまん』は五大尊中の不動尊を表はす梵字。この切物のある刀なら守りとなるに違ひない。『隨の刀』は「隨を握いた刀」の謂であり、梵字の切物のあるものには通常隨がある。



熱と痛み

感冒頭痛

ンリボソ



實發田武

ソリボンは、最新の藥理「藥物相乗作用」を應用して製せられたものですから、その解熱鎮痛作用は強力であり、而も長続きし、副作用は反對に減じられて居りますので、感冒の發熱、頭痛、神經痛、齒痛、腰痛等の熱や痛みに好適な藥劑です。

（國內價格）
各縣・各道・各府・各支店
知名藥店にあり

狸



前田 五健

千金の月に狸は一升さげ
耕一路

狸は何所となくのんびりした
點があつて、人間に尤も親しみ
易い信仰に、引きつけ易い力を
もつておるのは狸外の理とでも
云ふのか、興味が深い。

彼の應永二年（今から五百四
十餘年前）大林正道和尚が伊香
保で、フト知り合つた守鶴和尚
と共に上州館林に地を選び、青
龍山茂林寺を建立したのは「分
福茶釜」で有名な話（文福でな
い分福が正しい）である。守鶴
は古狸で十代の和尚に仕へ後ち
現はれて天空に去つたと云ふ事
が何かの本で見た。

どうも狸は寺とか堂に縁が深
いらしい玩具類や器物の狸でも
和尚が多い。圓轉滑脱圓通自在
と云ふ譯でもあるまいが佛教に
縁が深い様である。此も凡俗を
濟度する上に觀念化から形象化
續いて信仰化し、善導の方便で
あつたに基因し、智慧のある

和尚さん達の考案かも知れない
注連張つた大櫓からうける威
壓と何やら知らず感謝の念、尊
敬の念が湧くのも不思議であ
る、一木一石も説くに法と道を
持つてすれば、それが生きて來
る。

松山市廳舎前に四、五年前迄
大手を擡げた様な大櫓があつ
た。今でも、こゝの電車停留所
名を「八股」と呼んで、昔話の
なつかしさを残して居る。大阪
商大の外人教授であつたか四國
巡遊の途、この大櫓を見て「交
通整理」の樹だと、當時の新聞
記事に漫畫入りで紹介されて居
た。此の大櫓が八股であり、そ
れに棲んで居たのが「お袖さん」
と稱する有名な狸である。

伊豫鐵道電氣會社の道後と松
山驛間の市内電車複線工事に、
邪魔になるのでどうしても伐ら
ねばならぬ事になつたが、さて
あまりに傳説と、信仰者が多い
ので、我れと思はん伐り手が無
い。結局、半島人が請合つて、伐
つたが當時は、相當の騒ぎであ
つた。黒山を築く見物人は何か
奇蹟でも現はれぬかと、寫眞機
まで用意して片唾を呑んだが結
局何んの事もなく、伐り倒され
んとした時「待つた」と飛び出
したのが市内の某氏、どう交渉
つけたのか、枝だけを伐り拂つ
て、殆んど丸坊主にして、掘り
上げ、エッサ／＼で、松山市よ
り約半キロ南の天山、喜福寺山
へ移植した。

檀信仰者（重に花柳界の人々）
の喜びは大したもので、その當
時は喜福寺山へ御見舞やお願
ひの詣りが少なくなつた。

しかし、惜しい事に其の年は
數十年來の旱魃で、あたら信仰
の名木も立ち枯れと成り今で
は、枯れた巨骸の後ろへ若木を
植えて二代目を育て、居るさう
である。

この櫓がまだ盛んに八方へ枝
を擡ろげ、根元の小さい祠へ赤
轡の何十本も樹つて居た或年
の或月、現在市内で堂々の門戸
を張り開業して居る某産科婦人
科醫の自宅へ、夜更けの表門を
叩くものがあつた。
「先生に是非來て診て戴きたい
のです」

「困るなあ先生は一寸風邪で寝
て居るのじやが」
「誠にお氣の毒ですが、先生で

ないと、いけないと奥様が申す
のです、どうぞ願ひ申しま
す」

書生が體よく斷らんとするのを
聞いた院長さんは
「行こう、折角俺を呼びに來
たのへ、行かなければ醫の名に
對して濟まん」

こんな譯で、迎ひの人力車に乗
り、折柄ボツリボツリと降り出
した雨中を、何所をどう走つて
通つたか判らず患家へ着いた。
「こちらへ」

立派な宅である召使ひの衆も多
いらしい診斷すると産氣……そ
れも難産……ヤツト名手の腕に
子は産れて、邸内に喜びの聲は
舉つた。

それから再び俤に送られて歸
つて來た朝手術着の白服に夥し
い毛が附着して居る
「ハテ猫も犬も抱かぬのに」
先生は昨夜からの事を自己診斷
して見た。どうも腑に落ちぬ所
がある。行つた先は道後と松山
の中間北寄りの山手、祝谷らし
い、あそこに、あんな大きな邸
宅……

この不思議の診斷しきれぬ話
を、或る日或る會場で話した。
これを聞いた松山一流の料亭の
女主人が、
「先生ッそれは八股のお袖さん
じやがな、もし」

席上の皆なも、さうじや、お袖

さんじやと、さあ大評判に成つ
て、當時の新聞記事にも仰山に
掲載された。今でも俳人であり
繪もかくその先生とは心易いま
ゝ聞いて見るが、やつぱり判ら
ぬと云ふ
本當の様
な狸の様
な話であ
る。

そのお
袖さんが
棲む八ツ
股の大櫓
も伐られ
移植され
て、お袖
さんは何
所へ行つ
たのじや
ろの噂さ
の昭和十
一年初夏
豫讃線今
治、松山
の中間大
井驛の山
上、楊桃

効奏・期短・服内 12 炎腺桃烏

錠ルジベルア

れたと云ふ噂が、バツト、附近
から中國筋へ迄擴がつた。楊桃
じや工合が悪いと云ふのか、
その下にお堂があり材長さん始
め村一同の力瘤で「明堂様」の

御發展はスバラシイものであつた。

五色の吹貫や織をたてた、大船、小船は中國筋や瀬戸内海の島嶼部落から、船載さの様に押しかけ省線の大井澤も柵を催し、バスも道路も満員と云ふ有様、お賽銭が金刀比羅様程あつたとか難病へ自然に灸點の暗示があつて全癒したとか、口から口の宣傳は、ボスターやチラシ新聞記事以上のもつ力で、擴まつて行つた。

お供物はお狸の好み油揚げに小饅頭、この土産物や供物店が軒を並べる、何々酒も賣り出される、詣る人の目標はお狸であつても、表面は伊豫の豪族河野家の靈と何々如來の「明堂様」だから其筋も手が出ない、夜行列車の窓から見ると、山上山下猷灯の火龍聯なる壯觀であつた。

人心收攬の妙、信仰と傳説の力、は實際に微妙の無限力を持つて居る、例へ、つまらない説でも一度氣にかけると二度は本氣になる、三度は常識に成つて益々固まつて行く、これを善用すればこれで人心が安定すれば結構であるが……然し一方に時勢の大きな潮流を見逃してはいけない。

これ程盛んであつた「明堂様」も事變勃發頃から、次第に寂び

れて、今日では、昔日の傍もないお狸は眷族を連れて、戦争に行つたのかも知れない、いやさうして置くのが此の傳説にイイ處置であらうと思ふ。

昭和十五年九月十五日の某大新聞に「陣中綺談」として石太

川・柳・書・架 (七五)

皇紀二千六百年

記念句集

宮尾しげを編並書

▼本書は昭和九年、昭和十二年に上梓された川柳百人一句の三篇で、一篇二篇に漏れた人々に新人を加へて出来てゐる。序文は川上三太郎氏、跋は編著者▼昭和十五年十一月三十日發行四六版二六〇頁、發行所東京市豊島區巢鴨六ノ一二九〇宮尾方その社。定價が明記してないところを見ると必要なだけ刷つたのかも知れない。

▼著者の有名は改めて紹介する必要があるまい。書名は矢張り川柳百人一句の方がよかつたのではないか。この三篇が終篇であるが、營利的でないこの種の出版に多大の努力を惜しまれなかつた著者の勞を謝したい。

川柳文學雜稿

岸本水府著

▼本書の著者の序の一節にこれは私の「川柳をつくる上の難談集」であります。と記されてあ

線討伐戦に〇〇部隊の〇大尉が六千の敵を、火の玉の誘導援助で撃破した記事があつたが、これなども、〇大尉の郷里に若しお袖さんに似た何かあれば、キツト結びつけて信仰の目標と成るであらう、太陽を天體の一

る。著者が七八年間に「番傘」に載せた雜稿を蒐集したものである。戦時體制反古版として、廢紙を裏返して印刷されてある。思ひつきであるが著者も云つてゐるやうにいささか讀みづらいのが嫌だ。

▼昭和十五年十二月十九日發行四六版一七四頁、定價七八錢四三〇部限定刊行。發行所大阪市住吉區濱口東二丁目四番地番傘川柳社。

自由律川柳合同句集 I

▼本句集は「たまむし」「手」「紫」「川柳ビュル」「川柳風呂」「視野」「卷雲」「柳詩」等から採録した合同句集で、その大半の柳誌は過去のものと成つてゐる。

▼本書巻頭の序に、観田鶴太郎氏は「自由律川柳——私達が目づからえらんだ道とはいへ随分の難路であつた。しかもまだ前途は遙かである」と。

▼昭和十六年一月一日發行、和紙洋綴六・七五・三型。二百部限定版、定價壹圓五拾錢。編者伊良子擁一、發行者石川捨次郎、發行所神戸市須磨區村雨町七丁目三五視野發行所。▼編者は視野同人で自由律派の川柳人として知られてゐる。

つとして觀るのと、お日様として拜むのと心持ちに大きな相違がある私はお日様として拜む心を持つて居る、また拜む人々を尊敬する、科學も勿論尊い、傳説や感謝感恩、報恩の芽生へとなる理外の理も同じく尊いものと

のであると思ふ。(つづく)

う・め・く・さ

ものは極く大きい、極く小さいかで愛嬌が出来る。奈良の大佛ツあんは大きい方で愛嬌がある。拜む氣にはないが親しみは感じる。紙燃りの犬は小さい方で愛嬌がある。(不死鳥)



ウエーヴ 髪 淑

大阪・心齋橋筋周防町角

ナショナル

子 倫 山
口 經 營
電 南 992



「士義穂赤た觀らか柳川」

幹主郎路生麻 る語を

援 後
會協人柳川

會大柳川走師

催 主
社誌雜柳川

★日本は今、臣道實踐の一角で動いてゐる。臣道實踐といふことは今にはじまつたことではないが、胃が痛んで、はじめて胃の存在を認識した形だ。

★大正の初期であつたか、古賀といふ役人が日本武士道を鼓吹する具として浪花節をとりあげたことがあつたが、私達は臣道實踐で赤穂義士を引張り出し、師走川柳大會を開くことにした。

★日は極月十四日午後五時半、會場は武運の守護神を祀つた御津八幡宮。

★開會一時間前に、早くも和歌山市から馳せ参じた秋月宏方氏が表門からの一番乗りだ。先着四十七氏に贈る蕎麥券の「い」票を恐縮しながら受取る。次いで出席者へのお土産としては播州赤穂の大石神社の護符と、お輕の懷紙が渡される。受付には今日の會費が四十七錢だといふので、三錢づゝの釣銭を兩替屋よろしく押し並べて、麻生リリちゃん幹事の誰彼と共に頑張る。ソレ電話や、ソレ賞品やと、紫香、潮花、水客、アート、白柳子、里十九の諸氏が右往左往する中を、早くも七十餘名の出席者が會場狭ましと目白押しに押し並び路郎、柳秀、綠雨、

波夢造、春巢の五夫妻に、多數婦人の出席があり、恰も家庭川柳會の觀があつたしかも炭俵では春巢夫人の天賞、綠雨夫人の地賞で婦人部の活躍は目覺ましいものがあつた。賞品は赤穂まで幹事を特派したものの、忠臣蔵に因みあるものであることが幹事の味噌である。

★やがて當日持參の兼題清記に席題作句に句會氣分が盛り上つてゆく。

★句の締切は呼子の笛だ。

★司會者田中風葉氏おもむろに立つて、本會開催の趣旨を述べ「假名手本難題」の講演者岡田某氏をさしまねく。某氏は先づ假名手本忠臣蔵の筋書を簡単に解説紹介し、次いで構成並びに登場人物に就いて縦横に解剖して餘まずとこがない。(朗笑と拍手相次ぐ)

★席題「徳利(紫香選)、繩梯子(夜王選)、「山(白峯選)、「川」(春巢選)の披講。

は院入御
—す應にめ需

谷内小兒科病院

醫學博士 谷内與一郎

大阪市港區市岡元町一丁目(電車道)

電話 西 八四八 一七番

★續いて麻生路郎主幹の講演、演題は「川柳から觀た忠臣蔵」となつてゐたが、某人氏が忠臣蔵の話をされたので、師は「川柳から觀た赤穂義士」と改め、その方面の川柳のみに就いて話されることになり、古川柳には芝居の忠臣蔵を詠んだ句と史實の赤穂義士を詠んだ句と二様あるが、後者の句から、赤穂事件を江戸人がどうながめてゐたか、又句そのものの價值はどうか、それ等の句の分類と、解説をされ聴者の爆笑裡に降壇。

★兼題「早駕(豆秋選)、「炭俵」(鮎美選)、「忠義」(綠雨選)の披講。

★最後に長崎柳秀博士の川柳味ある小話、庄万よし市議の挨拶等があつて閉會した。時に九時四十分。

入賞句發表 (四十七氏)

兼題 忠 義

緑 雨 選

(佳) 忠と云ふ文字を千人針で縫ひ

豆 秋

(佳) 仇とは云はず忠義の名で残り

寄 興 史

(佳) 忠義者同士意見が違ふなり

小 松 園

(佳) 七生を君に誓つた決死隊

し め

(人) 後世は忠義な人と見直され

風 葉

(地) 縦隊に忠義が並ぶ雪の路

巨 人

(天) 落ぶれど忠義の心失はず

美 選

兼題 炭 俵

(佳) 炭俵冬のひかりのほろ寒し

鼓 瑟

(佳) 炭俵春の芝居の灯がとまり

豆 秋

(佳) 新世帯炭一俵の置きどころ

小 松 園

(佳) 首の座の雪を汚した炭俵

鉄 心

(人) 炭俵梅の屋敷の裏へ着き

某 人

(地) 申告もして炭俵の口を切り

美 奈 子

(天) 炭俵 モンベをはけば軽く持て

春 江

(軸) 炭部屋の吉良は狐心のまだ去らず

鮎 美

兼題 早 駕

(佳) 早 駕を下りて少し口吃り

豆 秋 選

川協のページ

東都の報ずるところによると、

と、東都の報ずるところによると、

と、東都の報ずるところによると、

と、東都の報ずるところによると、

と、東都の報ずるところによると、

と、東都の報ずるところによると、

(佳) 早駕は二丁さくら散る櫻ちる

水 客

(佳) 早駕が通つた昔の土の色

小 雅 子

(佳) 早駕がとほつた後でデマがとび

葉 光

(人) 早駕と雲がいつしよになつて賑け

双 葉

(地) 早駕は磯の香りもわからない

紅 多 呂

(天) 早駕を出て鉢巻がヘタ／＼と

千 斗

兼題 山

(佳) 早 駕が小さく走る箱根山

白 峯 選

(佳) あの山のつゞきに父は炭を焼く

紫 香

(佳) 不圖足を止めれば山は静なり

紅 多 呂

(佳) 三代目山の土まで賣つて喰ひ

双 葉

(人) 山一つ越して大和の言葉知る

柳 秀

(地) 父と子の呼吸おもしろく山を降り

白 柳 子

(天) 富士山はカメラにあいたとも云はず

鮎 美

兼題 德 利

(佳) 德利を三べん振つてのぞき込み

紫 香 選

書初に電話のかかる

風 葉

和 正 堂

書畫材料商

大阪心齋橋筋二丁目
電話南二七五番

白外郎、至宏、久米雄、天國、

紫浪、風來子の七氏入賞、なほ川

維大鐵局支部の某氏入賞、下關驛に、

川柳で近況を報告される豫

定である。

包報は三四ページに發表

席題 繩梯子

(佳) 繩梯子だん／＼息が亂れて来

夜 王 選

(佳) 順番でチトもめてゐる繩梯子

双 葉

(佳) 繩梯子下から隣組のこえ

美 知 夫

(人) 捨石になる氣無言の繩梯子

八 九 滿

Sata Special Klinik

呼吸器病科

内科

佐多愛彦

加藤謙一

螺長四郎

電話 1191

院醫多佐

四八二八北電 町北島堂坂大

金策に行く身を踏切はむやう
小使の頑固も職域奉公なり
轉業へ焦付く貸をあきらめず

女連おだてられたりおだてたり
奈良縣田町 嶋田 翠峯

川柳誌勤め先へも一部置き
そのあくる日掃除をしてる女給を見
月曜の朝は私用に手間をとり
兵事課は國民服をもう造り

初老とや眼鏡かけたり外したり
新體制不平はいはぬ事にされ
小松 勝山しとし



貝 卸

★ 岡田某 人

三つ葉。腺病質な少女。うち
にお客さんがあります。

蕨。野原のいろで束ねられ。

鶯。もと震旦の生れ。草双子

諸曲本の中にある。

雉子。餌をあさりに来たので
はございません。武士。——そ
れも元祿。

※

東縛の美德。自由の夢をはら
んでゐる。
※ 家のことを考へながら放蕩し

を除いただけ。最初紋付の羽織
袴で来てゐた孤蓬さんを何事か
と思つてゐたが、知己の結婚式
が今夕六時からあるとの事で、
二階の座談から中座されてゐた
が、この宴會であの福々しい顔
の缺けてゐたのは少し寂しい。
漸く座に活が這入り、次第に
皆の聲が高くなる中を、かほる
さん獨特の聲音が絹のリボンの
やうに僕の酔ひしれる頭の芯へ
巻きついてくる。先生とかほる
さんとどちらが強いでせうと
の丹路さんに答へて、それや酒
に強いのは僕の方だが、かほる
君は僕よりよく呑むよ。と先生
の御返事。成程、先生は御酒を召
てゐる。これはうらがなしい。

※ こわれた萬年ペン。——やつ
ぱり抽斗の中に轉がつてゐる。
廢疾年金がつきます。
※ 唄うたひがある劇場を借りて
唄をうたつたとする。入場料一
圓と假定して、三千人入つたと
すれば三千圓。それで唄つた時
間が三十分とすれば、一分百圓
である(伴奏その他を無視して)
が、それが彼の唄の値打ちだと
早合點してはいけない。何故な
ら、この三千人が全部なければ
の財布をはたいて、用事を繰り
合せて来たのならば、或はそう
なるかも知れないが、そのうち
千人はほかに遊ぶあてがなけれ
ば、時間つぶしに入場したとすれ
ば、愉快に語り、愉快に語つ
てお酒を召すがかほるさんは、
既に、とてもよい氣味で、
呑めや歌へや舞へや呑めやで座
を一人賑はしくとりもちされ
る。二階の大飯辯が甦み返つて
此處でも、エゲツナイ、イゲツ
ナイの眞偽が問題になつたり、
酔つても、參つても、やはり言
葉の問題が氣にかゝるのは流石
に川柳人の集りか。さても此處
騒々しい場所では特に忘れら
れがちな緑雨さんは、而もその
儘の人格を偲ぶ川柳も淡々とし
てゐて、川雜創刊號以來の會
員であり元老であるが、呑んで
も呑まなくても、ムツツリしてゐ

て、それで面白い時には一緒に
笑つてござるが、伊丹の酒を一
人で呑んでしまつたやうな赫顔
が、頭の頂上と同じ色で、いく
ら呑んでも赤くならない盗人酒
の某人とはよい比較であつた。
郊外の九時と言へば草木も眠
る位に更けてゆく。丹路はん泊
めとくんははれや」といふ遠慮
のない口を押へて、これはまあ
色々とお馳走になりまして、お
騒がせしまして、本當に御面倒
かけて、いや有難うございまし
た。と銘々てんで丹路御夫妻
にお禮を述べて、フラリ／＼と
火照つた頬へ秋の夜風も心地よ
く家路についた。(詠純記)



三會と四M其他

小山 文三

○ 議會、面會、宴會の三會を大臣の三厄介と言ふとさる名士が皮肉つてゐるのを讀んだ事がある。近頃の會社の重役連の間では會議と面會と宴會の三つが三厄介であるらしい。

○ 戰爭を遂行するためには人、資材、金の三Mが必要である。米國の雜誌が喝破してゐる。我國のさる學者がもう一つ精神力を豊富にする事が肝要であると附け加へて之れを戰時の四Mだと説いて居る。尤もな事だと思ふ。

○ してはならぬ事と、せずともよい事と、せねばならぬ事の三つがあると某誌が書いてゐた。此三つの使ひ分けがはつきり出来る様になれば立派な人格者であらう。此三つを假りに三ならぬと言ふ。

○ 正しきものは強し、愛する者は強し、信ずるものは強し、と或宗教家が唱へてゐる、これが人生の三強味と言ふ。

○ 命もいらず、名もいらず、官位もいらず、金もいらずと云ふ人は始末に困るものなり、然しこゝろゆふ人でなければ頼りにならぬと西郷南洲が言つて居る、こんなのが四不要の人と言ふのであらう。

○ 世人を區別して、する人、せぬ人、できる人の三種があると云ふ事である。できる人の如き手腕はなくとも、眞に勤勉なる實行人を珍重したい。

○ 富める者は富を外し、智ある者は智を外し、力ある者は力を外してかゝるのが實際の秘訣であると二宮尊徳が説いてゐる。此人生の三外しが出来れば一億一心立ち所に成る筈である。先人の遺訓は今更ながら尊いと思ふ。

○ 走つてゐるよりは歩くが樂、立つてゐるよりは座つてゐるが樂、座つてゐるよりは寝てゐるが樂、寝てゐるよりは死んだ方が樂と云ふトルコの諺がある。



一路集

名刺 艸樂選

公職の名刺で非常線を抜け無心とは知らずに名刺とりつがれ名刺屋の見本に友の名を見付け轉動く使へぬ名刺が殖えるのみ我が名刺松の内だけ使はれる代議士の名刺がきいて職につき受付へ名刺忘れた手間をとり最近に一遍來いと名刺呉れ突然の記者の名刺に祝はれる名刺もう別な世界の君と僕名刺まだうちとけぬまゝ置かれてゐる履歷書に添へた名刺へあらたまり記者といふ名刺が幅をきかせてゐる居留守とはよめたが名刺置こ出る名刺受け名刺こぼれて初日の出保險屋と言はず紹介名刺だけ御年始に私も來たよとある名刺榮轉へうれしく名刺すり直し見送つて名刺へしばらく噂が出何のかのと言つて名刺を置こ去に若き日の名刺は書けるだけを書き(人)戌の日に産婆の名刺大事がり(地)昇格の名刺へ朝の光射す(天)逆境へ名刺を一枚探し出し

古藏へ昔の儘の陽があたり藏の隅隅住み良いとこにして

藏 丹路選

翠峰

塗立ての藏へ理想の嫁が来る藏貸して又冷笑の種を蒔き風の強さへ藏だけが残りむづかりの子を藏へ来て怖がらせ宿望の藏も建てずに死んで行き金貸しの藏とん慾に立つてゐる藏の隅古証文を讀んで見る御先祖の聲がしそらな藏の奥婚禮の後で他人の藏になり焼跡に土藏が寒う残つてゐる貸藏と書いてゐる人の秋淋し化物か蛇でも出そうな古い藏更生へ藏の中まで整理する歸省して藏もうれしきかつのうち穴藏の中で蠶紙は春を待つ火繩銃藏の掃除に見付けた二ツ三ツ藏を潰した節廻し藏建てての慾を押へて恙なしお隣の藏を目當に教へとき金絲銀絲をしまつく藏となり白壁の土藏落書きせつけず傳説のある藏重い扉をとざし槍刀遠い祖先を思ふ藏藏もある家に生れて不幸な子白壁の酒藏つづきなたね咲く藏の屋根寫生の位置が定らない小作フト藏を見上げた農繁期藏の窓みんな開いてる秋日和第三號の藏が都市計劃にふれ微の香も父祖傳來の藏の中小僧さん鼻唄まじり藏の中目じるしの土藏遠くで黄昏れる白々と藏二ツ三ツ並んで居藏並び豊かな村の秋の色守錢奴の惡罵に増える藏の數

寄與史 霞舍 ライト 香林坊 あつし よしみ 謙公 博行 龍路 伯峰 翠芳 抱逸 一龜 久人 神樂 夢女 對州坊 双虎 春集 同 久枝 同 洋子 同 ユリエ 同 九坡 同 風來子 同 同 眞理子 同 同

これを四樂と言ふ。
こんな事なら寧ろ生れて來ない方が尙、樂であつたらう。

○英國の田舎で、西洋建築の家に住んで、日本の女を妻にして支那人のコックを使ふのが支那人の生活の理想だと聞いて居る。

○古い昔でもないが凡十五六年前には大阪市電の給料を買つて阪急電車の車台に乗つて南海線路を走らせて見たいと云ふのが、當時の車掌氏の念願であつた事もある。これをとては叶はぬ四夢想又は三夢想と言つてゐる。

○一家柄に、血筋に、方位、年廻り、の四つが結婚調査の四原則だと云ふ。肝心の相手の人柄を忘れてゐるんだから面白い。

○世の中に意見が三つある。他人のと、僕のとそれから真理と……と説いてゐる。大體、多くの場合に意見の相違だ！として片付けてしまつて真理の探究を怠るんだから複雑になるのである。

○誠實、勉強、研究、自省が成功の四秘訣だと聞

いた。更に幸運が伴ふたら尙更成功であらう。

○日本に勝れたるもの三つあり
フキツシユ、フルーツ、フラワ
ーの三Fである。これはチツトこぢつた三Fらしい。

「自ら活動して他を働かしむるは水なり、常に自己の進路を求めてやまざるは水なり、障害に遭ひて激しく其勢を百倍し得るは水なり」と。
○宗教家と云ふものは誠にうまい事を言ふものである。

○義理をカク、人情をカク、愧をカクの三カクが出来ねば金儲けは出来ぬと言ふた馬鹿者がある
反對に思ひ切と親切と大切でなければ金儲けは出来ぬと言ふこの三切も苦しいコヂツケである。

○一には身に道を行ひ、ひが事無くして善を樂しむにあり、二には身に病なくして樂しむにあり、三には命長くして久しく樂しむにありとは貝原益軒の訓である。
○こんなのがほんとうの三樂であらう。(二五二一八)

曙光かゝやうて

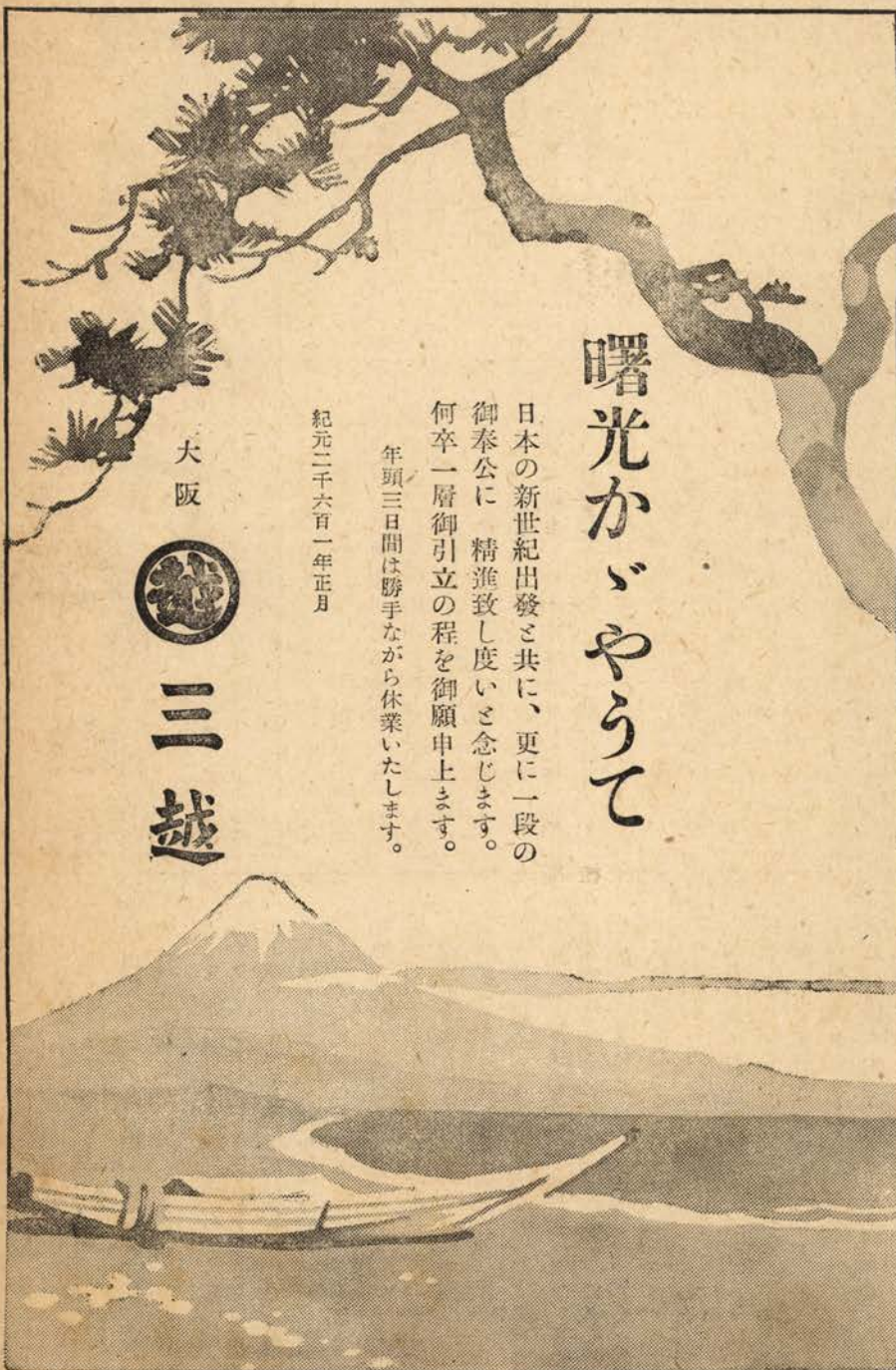
日本の新世紀出發と共に、更に一段の御奉公に 精進致し度いと念じます。
何卒一層御引立の程を御願申上ます。
年頭三日間は勝手ながら休業いたします。

紀元二千六百一年正月

大阪



三越



各地柳壇

規 清 稿 投

▼用紙は原稿用紙
▼文字を正確明瞭に
▼開催月日及場所記入
▼締切は毎月廿五日
▼投稿先は本社宛

いのちある句を創れ

川柳雑誌主催・川柳人協會後援

師走川柳大會 (大阪)

入賞句は別欄大會記事参照

出席者(順不同)

路郎・宏方・潮花・水客・紫香・白柳子・かほる・霞舎・八九満・角堂・双葉・巨人・一龜・桃園・一笑・綠雨・美奈子・神樂・ライト・翠芳・九柳・豆秋・鮎美・孤蓬・龍成・某人・鼓瑟・風葉・白峯・小松園・青兒・榮・水虹・久枝・彌生・美知夫・亞鈍・雄午・琴泉・鉄心・洋・はな子・靜枝・春葉・春江・滿潮・立名・恒治・夜王・里十九・波夢造・正子・鋭々・小雅子・八櫻・寄與史・柳秀・しめ・哲・紅多呂・アート・形水・万よし・蓼乃・夢裡

兼題「忠 義」 綠 雨 選

瓦版賣りに忠義の名が呼ばれ
それ／＼に化けて忠義を忘れず
軍服の汚れ忠義の汗と泥
引揚げの義士にうれしい日の出
人氣なく忠義な人の屋敷跡
忠義にも義理人情がつきまとひ
忠義とは別に借金少しあり
日の丸の下で忠義の眼をつむり
忠義へは私事もすてます日本人
定紋のいわれを忠義話すなり
忠義一徹丸刈のまゝで老ひ
足輕も立派に忠義の列にゐる

美知夫 青風 久枝 鮎美 某人 雄午 孤蓬 水客 美奈子 かほる 某人 久人

兼題「炭 俵」 鮎 美 選

陽あたりに猫の寝てゐる炭俵
團服の手で配給の炭俵
一俵の炭わけ合うて隣組
みんな見に出る配給の炭俵
炭の荷と又も行き合ふ山のバス
炭俵師走の風の中で燃え

九柳 水虹 銳々 某人 孤蓬 一笑

兼題「早 駕」 豆 秋 選

早駕にねずみ一疋逃げまどひ
早駕へ床屋妙な噂する
早駕の舞台一ぱい派手になり
早駕へ東海道の砂けむり
早駕へ一番鶏の聲がする
早駕の蹴飛ばして行く馬の糞
早駕は父の死目に會ふ氣なり
早駕が二丁子守を恐はがらせ
早駕へかつぐ役者の細い足
早駕へ鳥も鳴いた夕まぐれ
早駕の事情は知らず汗を拭き
早駕の赤穂へ着くと取り巻かれ
早駕の後先へ灯がついて来る
道の草木もなびく早駕
かどわかずやうに早駕飛んで行き
早駕は花の京都をかけ抜ける
城内に早駕着いた灯がともり

かほる 形水 白鷗 小松園 白峯 波夢造 水虹 かほる 彌生 八九満 美知夫 鮎美 綠雨 青兒 しめ 潮花 春巢

早駕は東海道の松をぬけ
早駕は掛聲ほどに抄どらず

柳 秀 潮

兼題「山」 白 峯 選

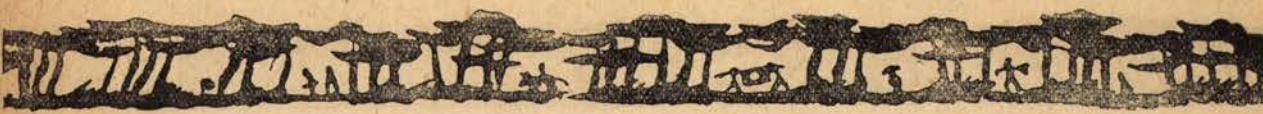
出張は故郷の山を見て通り
頂上でも一つ高い山が見え
後から呼ばれる様に山を下り
山一つ越えて巡禮宿がなく
ちつぽけな山でも決死隊がいる
出し抜いてやる氣を山で忘れたる
バス降りてそれから登る山の宿
文明は山のてつべの飛行塔
噴火する山あり日本の決意なり
動かざること山の如くにして儲け
敵の居る山もちらほら紅葉して
富士見んと車窓に赤き眼を向けぬ
頂上で逆立をする若さなり
軍事便南支の山も春霞
山彦へ上役の名を呼び捨て
山道の險しさ寺の有難し
山また山あんなところに人が住み
アスファルト切れて此處から登山道
山登り元氣に駆ける興亜の子
歸還して見つめる山に目がうるむ
山彦へ不平を云へば云ひかへし
杉の木丸さ大津の見へる風
大石は山と川との合言葉
雲動く山戦友の眠る山
山一つ向ふが敵の居るところ
山に來て煙突なんかよんで居る
山と川互に無事な顔と顔
新體制此の奥山に隣組

久枝 紫香 かほる 美奈子 豆秋 水虹 彌生 孤蓬 亞鈍 夜王 某人 洋 八九満 滿潮 鉄心 ライト 宏方 水虹 一龜 琴泉 龍成 潮花 神樂 青兒 一笑 八櫻 寄與史 九柳

兼題「德 利」 紫 香 選

德利と別れ赤垣見直され
德利のころんだ音もうれしい日
二合程一升德利へ賣つてくれ

琴泉 小松園 豆秋



雪ふんで来る徳利へ犬が来る
熱そうに幹事徳利を運ばされ
徳利をたゞいて見てる大晦日
徳利を賞めて返盃してくれず
徳利からつぐにはちよくの小さき
一本の徳利樂しむように飲み
しよ／＼とするなど徳利追加する
櫓の火はとろ／＼徳利話好き
御土産の徳利金色ちとまじり
貧乏な暮しの中にある徳利
邪魔にならぬとこへ徳利二本置
御時世は徳利の数をきめられる
おかほりを云と徳利をふつて見せ
徳利を掲げてゆつくり歩くなり

席題「川」

春 集 選

師直の首も寫して隅田川
血達磨が川と答へて槍を引き
川一つ越すを許してくれぬ米
大聲で川の上にも隣組
川一つ向ふ爆煙あがるなり
名物のネオン映らぬ川になり
川風はふと良心にはづかし
川添をモンベ娘が唄で去に
ふるさとの川に流れる紅椿
千鳥足大川端の風もよし
船頭を呼ぶのに川が廣すぎる
川風へ顔をそむけた切れ話
川過ぎて鮎ずしを賣る驛へつき
ボートの灯堂島川を夏にする
想ひ出の小川にあひる泳いで居
大阪の尻を川から覗いて見

席題「繩梯子」

夜 王 選

繩梯子恐はん／＼幕吏登るなり
二番手が尻を押して繩梯子
雪すこし拂ふて登る繩梯子

潮 花
かほる
夜 王
亞 鈍
宏 方
桃 園
巨 人
某 人
孤 蓬
美 知 夫
かほる
鉄 心
久 枝
水 虹

繩梯子片足かけて下を呼び
消防の靴がかゝつた繩梯子
プロペラの音を聞ける繩梯子
繩梯子音なく散つた屋根の雪
繩梯子一番乗りと叫びたり
降る雪と月へ投げたる繩梯子
茶山花の花をくずした繩梯子
繩梯子俺につゞけと部隊長
繩梯子四五人動く雪明り

川 下 關 支 部 句 會 (下 關)

國 弘 半 休 報

眞剣の姿が見える軍事便
子の消えた小路から出た太い犬
本當の姿にふれた二日酔
叱られて歸る姿が氣に懸り
スタイルに自信ある娘の癖好み
姿見にまだ塗り足らぬ顔を寄せ
姿見へ隠し切れない程疲れ
紙芝居戦死のところで陽が落ちる
紙芝居今が最後の太鼓なる
注射の痛さつめて話し合ひ
萬一を祈るカンフル無黙でした
注射する我にみよりの遠すぎる
冗談が一寸とぎれた注射針
父の羽織を着せたがる母にして
羽織だけそつと後へなぞて出し
退院の羽織うれしい紐を締め
どす黒い腹から滲み出る笑ひ
冷笑の中を負けない氣で座り
冷笑をよそに頑固のまゝで活き
非常時と云へぬ火鉢の明々と
孫の手を大事に火鉢へ祖父は出し
夏火鉢煙草は別な火でつける
不心得さとす火鉢が叩かれる
店火鉢小僧はませた手をさすり

桃 園
白 柳 子
白 峯
風 葉
豆 秋
鮎 美
潮 花
柳 秀
紫 香
正 晴
東 一
半 休
靜 子
風 來 子
潮 流
白 陽 子
同 文 福
同 米 三
市 多 樓
同 風 來 子
山 彦
藤 市
白 陽 子
草 路
米 三
殘 月
光 輝
半 休
伯 峯
風 來 子

川 廣 島 支 部 句 會 (廣 島)

みさこグループ (白外郎君 除隊歡迎)

大 森 風 來 子 報

お樂にと火鉢に如才して下かり
獨り居の火鉢茶も沸き菜も煮え
待かねてゐぬ人からの見舞狀
見舞金豫算に入れて病んでゐる
母からの片假名文字で見舞狀
火事見舞あとで保険の話が出
こそばゆく悪友下駄を揃へられ
空腹の子が亂暴に下駄を脱ぎ
服に下駄履くをモンベが振り返り
孝行も親の言なり下駄で行き
盥から月をほめ／＼下駄をまち
下駄履けて親の苦勞が一つ増え
嬉しさが胸一杯の下駄で来る
突然におゝとび出す草相模
突然の客へ一段ふみはづし
モンベ着た今日は唇つくるはず
唇をとがらせ女馬が合ひ
口紅は塗れど不満な顔であり
唇に御賜の煙草當てたまふ
弟の罪を兄貴がかばつて出
濡衣を女房までが聞ひ詰める
濡衣を着た儘故郷を遠ざかり

光 輝
久 米 雄
同 麥 作
斗 風
柳 月
秋 史
伯 峯
市 多 樓
苦 笑
賢 次
殘 月
九 呂 平
正 晴
光 輝
麥 作
同 牛 歩
一 步
梅 王
賢 次
柳 月

松江支部同人會 (松江)
十一月二十三日 於 山川兒居
勝谷山川兒報

吹奏團今夜も寺の庭を借り 豹
墨痕鮮か村長さんの揮毫すみ 柳人
異状なし今日も楽しい飯の味 祥月
吹奏團雨の中なる御奉公 都之介
軍靴高らか大日本は異状なし 笑鬼
吹奏團バツと點つた百ワット 山川兒
脚の毛の躍動もする石井漢 同

竹原支部句會 (廣島縣)

平凡な夢を長男持たされる 芳郎
平凡な一生だつた靈柩車 みづほ
ノーチツ旅の酒場をさらりと出 斗秀
其のチツプ貰はぬ意地も持ち居り 愛鳩
御祝儀の禮應揚に受けて居る 芳泉

今治支部句會 (今治)

長野文庫報

登山服草を掴んで起き上り 敬道
薬掴む氣持〇〇教に凝り 文庫
シグナルの赤青暮れの街せわし 敬道
色丈けをほめてトマトを食居る 向上庵
青雲の志あり丘に立つ 敬道
非常線虫が啼いてる夜のしじま 市多樓
非常線こんな所に手がとどき 醉月
非常線未だ本物はつかまらず 敬道
非常線都會をせまいものにする 同
咲いてもらふ苦勞陽に當て雨にあて 鬼外
盆栽の價值も分らずよく稼ぎ 文庫
盆栽へ大無禮なる振舞ひす 同
盆栽に趣味持つ巡査腰をかけ 市多樓
ハイヒール長屋住ひの娘と見えず 敬道

塗青支部句會 (大阪)

十一月十二日 於 菊川久居

淺謙公報

書きかけて葉書ですまぬ事にふれ 博行
債券は賣切れですと局の窓 ひさし
債券を買ふ氣の妻の手内職 双虎
債券を買うて夕餉の和やかさ あつし
説明をするも嬉しい母と旅 よしみ
朝立ちの寢床から見る空模様 棟友
旅すれば出雲訛りで柿をくれ 香林坊
三等車温泉町は窓の下 同
商用の旅も長閑な花見頃 謙公

四ツ橋支部句會 (大阪)

中内翠芳報

遣家族を温情で守る隣り組 糸柳
温情が四億の民にわかりかね 山人
温情がみんな素直な弟子にする 秀甫
温情を強る師走の慈善鍋 輝翠
御結婚ですかと番頭選つてくれ 白峯
結婚をせきたてゝ來る國の母 綠雨
炊出しにバケツの數の賑かさ 朗舟
炊出しの火を遊ばせず味をつけ かほる
垣根越し回覧板が廻つて來 飛鶴
回覧板新體制を説いて行き 靜峯
回覧板女中が讀んだだけの家 美奈子
回覧板朝の挨拶して歸へり 綠雨
洗濯の手に渡される回覧板 同
回覧板新體制と信じて居 同
見た様な顔して廻す回覧板 同
急用の回覧板に箸を置き 翠芳
回覧板念を押された日向ぼこ かほる

堺支部句會 (堺)

十二月六日

於 角堂居

軍犬も兵もいつしよに殊勳甲 孤蓬
軍用犬ちぎれた耳のまゝ還り 華光

角堂

敵を得た軍用犬は一文字 角堂
飼買うて献納犬に饒けし 霞舍
軍用犬暇には豚を追廻し 一龜
愛犬出征坊やの眼がうるみ 銃人
軍用犬捧げて子なしほつとする 貴志子
捧げ銃軍用犬も東向く 豆秋
銭湯で肩流し合ふ隣組 忠
虫すかぬ奴とも云はず隣組 喜堂
隣組常會猫も抱いてくる 豆秋
生活の智慧も借合ふ隣組 葉光
焚火して組中來いと呼集め 霞舍
若夫婦隣組にも憚からず 虎太
炬燵から見れば峠は雪もよい 孤蓬
好い思案つかず炬燵で寝てしま 一龜
炬燵まで肴の名前申し上げ 豆秋
炬燵から嫁の話に口を出し 角堂

布哇支部句會 (ホルル)

十月

於 宮王菖彌居
前山北海報

好きな方脱がす羽織の裏も好き 風竹
裏店で知る人情の美しさ 北海
裏面あつて人間面白 麗花麗
裏長屋出て來た女とは見え 友郎
賣る人も買ひ手も裏の裏で行 山石
轉業の裏は課長と妓のつれ 草一郎
薄給は裏も表も御難なり 伯樂
裏口で母はお詫の手を教へ 葛子
天秤に男二疋がかけられて 一浪
女とはお金プラス虚榮心 麗花麗
お下りの本が汚れて居るとすね 北海
サンデーの寛げる身にアロハシャツ 同
我が家の前通り越す物思ひ 友郎
浴衣になればキリンを孫が出し 山石
胡瓜刻む音も俺には音楽だ 同
さつぱりと切れて淋しい灯を見る 革一郎

然るに伯父はつたで片身分すもなし

阪大川柳句會（大阪）

反大川柳可會（大反）

丸島利生報

不平など忘れ袴をつけてゐる 孤客

37

柳界展望

消息

▼十二月一日午後一時から「迷信と川柳」の座談會をカッヤ喫茶で開いた。出席者は澤田四郎作博士、石井白面人氏、戸田孤蓬氏、高鷲亞鈍氏、麻生路郎主幹の五人。座談會が恰度終つたところへ、清水白柳子氏が出席された。急に同業者の告別式があつたので、時間を通しられたのだとのこと。再び記録せぬ座談に花が咲いた。

▼岩崎柳路氏(張家口)は舊臘改選の張家口居留民團會議員に再度當選された。

▼十一月六日の日布時事紙上に麻生路郎主幹の川柳評釋が掲載された。句はすべて高澤一浪氏(布哇)の作品。

▼「川柳二千六百年史」の記念出版會が十二月廿一日夜、京阪前の福園で開催された。出席者は戸田孤蓬氏(主賓)、鳥居孝一、山本宣次郎、高鷲岩雄、米田曲人、×麻生路郎、麻生茂乃、高橋かほる、中島生々庵、北川春集、高鷲亞鈍、×岡田某人、田中雨月、村松夢裡、小畑自由、田×奥村丹路の諸氏。なほ發起人戸倉普天氏は上京、石井白面人氏は病氣のため欠席。(×印は發起人)

新春★句★會

★一月四日(土)午後五時半
★御津八幡宮
★兼題「一年玉」「日記」

川柳雜誌社

★社告

何れも改號された。
▼左記の諸氏が新たに不朽洞會へ入會された。
岡山 逸見灯竿氏(翁木九波氏紹介)

後記

★★★★★
▼「川柳雜誌」が戦線へ一銃後へと送り出されることとは、私の職城奉公の一つである。▼川柳は眞に日本的な短詩として今後の日本文化を育成するであらう。▼私はそのよろこびを感じながら新春號を編んだ。私と同感の方も多からう。倍舊の御支援をお願いしたい。▼表紙は五穀豊穰を祈念する北京の天壇で岩崎柳路氏の撮影である。▼迷信と川柳座談會を開いて國策の迷信打破に協力することとした。こんな談になることとみんなが熱をあげて面白い。▼小畑自由明氏の川柳賞篇「隣は新婚」は慥かに川柳味で打撃した小篇で、新春の好讀物である。▼戸田孤蓬氏は本號から「川柳世界史」を發表されることとなつた。「川柳二千六百年史」

を制作したあのエネルギーシユな努力が遂に世界史にまで及んだのである。
▼「舞組」と「蛇姫様」とは新春のち食ふとんかつ
ち食ふとんかつ
店 湖月
ち食ふとんかつ
ち食ふとんかつ

あ産

めいた

妊娠としての大切な責任はカルシウムを補給して諸病を防ぎ、子宮の収縮を容易ならしめ「安産」へ導くことにあります。



片瀬醫學博士 推奨
片瀬醫學博士 監査

カルシウム錠

大阪道修町 和田卯助商店

戸田孤蓬著 麻生路郎序
御註文は堺市出島海岸通二丁(振替大阪三〇三九二) 不朽洞へ
柳川 二千六百年史
定料價 六九〇 銭

蘇東

丸尾潮

尼奇支部、尼奇美知

▲縮切は嚴守されたし。

書
（東京）かん東京堂
（神戸）



フケ・カミを止め白髪・若禿
を防ぎ明朗な青年美を創る



髪のは
げに日本の姿なり

伊豆椿ホーマー

伊豆椿香油本舗

大槻彩芳 園

防炎火唯一の發明品

消防帽、旗

カタログ有り



製造發賣元

加藤旗徽章店

大阪南區本橋筋五丁目四番七
(我町又點半丁北入西側)
電話④四七二・二六五五番

丸形・角形・小判形・
組立式各種・藥品・食
料品・菓子等の容器と
して最適

金屬代用紙罐
紙コップ

ガラス罐代用
紙容器



大阪市住吉區晴明通一丁目四〇番地

二葉屋商店

電話事務所用〔天下茶屋 四一〇四番
我 四三〇二番〕

菊正宗



株式會社 本嘉納商店

りとびきに

美^び顔^が水^{んすわ}

蚤・蚊・南京虫等の
毒虫でカユい時！
然ういふ時にも不思議なほどよく効きま
すので、殊に小さいお子方のある御家庭
などには殊の外重寶がられてゐます。
▲ニキビ吹出物に非常によく効くの
で大評判の薬です。ニキビや吹出物
でお困りの方に大きな喜びの糧ノゼ
とお勧めしたい薬です！

▲定価一銀四十銭・六十銭・一圓廿五銭。全国藥店にあり

阪大・京東

館天順谷桃

ニ	吹	ぜ
キ	出	ヒ
ビ	物	此
。	に	薬